產政塾

XIII

產政塾

この編は、三十歳前後の前途有為な若者が
溢れる心の叫びを綴ったものである。

目　次

●産政塾Ⅷの発刊によせて
㈶中部産業・労働政策研究会　植本俊一 …… 1

●夢が、殻を破る
トヨタ自動車労働組合　井上正勝 …… 9

●産政塾を振り返って
中部電力労働組合　内田恭介 …… 15

●自分と家族
フタバ産業株式会社　梅田清孝 …… 21

●『対談』
松坂屋労働組合　太田正樹 …… 29

●変わるってムズカシイ
デンソー労働組合　門井徳孝 …… 39

●「夢」を大切に！
トヨタ車体株式会社　熊崎俊哉

●「短パンに革靴な私」……アイシン精機株式会社　佐野智弘　45
●「今までの自分とこれからの自分」……トヨタ車体労働組合　鈴木定晴　53
●広がる世界……名古屋鉄道株式会社　鈴木　武　57
●山　行……株式会社豊田自動織機　田中亘人　63
●「Nice to meet you!」……豊田市役所　夛和田光紀　69
●いつまでたっても殻の中……全トヨタ労働組合連合会　出口隆浩　77
●「いろんな出会いを大切に」……アイシン労働組合　中川年史　85
●四角い空間……トヨタ自動車株式会社　野坂利次　93
●『とりあえず、やってみることだ！』……豊田工機労働組合　服部淳二　101

●大マジに反省しました。良かったです、産政塾。……アスモ労働組合　水野雅通……109
●転轍機（ポイント）……株式会社デンソー　宮城英樹……117
●『産政塾の集いの中で・・・』……刈谷市役所　村口文希……127
●「ふれあい」……東邦ガス労働組合　森　勝……135
●「町の先にあるもの」……アラコ株式会社　山本徹真……143
●時の彩り……中部産政研　安井孝一……151

産政塾XIIIの発刊によせて

（財）中部産業・労働政策研究会が主催している若手セミナー「産政塾」が、このたび第十三期の活動を修了し、今年も二十一名の塾生が卒業いたしました。

産政塾は、異業種の若者二十名あまりにご参加をいただき、約一年間に渡って行うセミナーであります。セミナーといっても、あらかじめテーマやスケジュールを決めて講師の指導を受けるといった通常のスタイルとは異なり、参加したメンバー達が自らの企画でテーマや講師を選び、現地に出向いて体験や教えを請うといったプログラムを組み、その中で学ぼうとするものであります。また、産政塾は異業種の若者の集まりですから、多様性を取り入れた論争の場でもあります。企業や仕事の枠を越えて、お互いが夢を語り、天下国家を論じ、講師を交えて論争をし、論争の中から新しいエネルギーが生み出されもします。この活動を通して、参加者は自らの考えを改めて検証し、自分自身の存在や役割を自覚することができることとなり、産政塾は言わば〝自らを磨く道場〟というようなものであります。

今回も産政塾への参加者は三十才前後の若者達であり、意欲においても能力においても次代を担うにふさわしい人材の集まりとなりました。

人間形成の基本の時期は青春期であると言われておりますが、仕事や家庭における人間としての枠を形成するのは三十才前後からの十年ぐらいと言えるでしょう。一応仕事にも慣れ、自分で判断できる能力も備えつつあり、精神的にも肉体的にも充実し、仕事面でも家庭面でも先頭に立って活躍する時期であります。このような若者が集う産政塾は、今期も塾生がお互いに夢を語りあい、自らの企画によってその実践に情熱を注ぎ、そして一年近くにわたる活動を終え、このたび修了いたしました。

第十三期にあたる二〇〇二年の活動では、塾生は各企画をよく練り上げ、「創造性」「独創性」「チャレンジ精神」に富んだ実のあるものにしてくれました。このセミナーを通して、参加者一人一人が新しい時代に対応するパラダイム、ものの考え方を築くための「何か」を得ることができたものと確信しております。

この冊子は、第十三期生が産政塾での様々な体験をふまえて、自らの想いを「若者のロマンと叫び」として綴ったものであります。ぜひご一読をお願い申し上げます。また、産政塾は極めて小規模の催しであり、参加対象も限定されたものではありますが、こうした冊子を通して一人でも多くの方の共感を呼ぶことができればと思って発刊をした次第であります。塾生と同世代の方々の糧となることはもとより、指導的立場にある方々にとっても参考になることが多いと思います。

最後に、これまで産政塾の運営に対して格別の理解と協力を賜りました講師の方々をはじめ、関係各位の皆様に感謝を申し上げます。また同時に産政塾および塾生に対して今後ともご指導、ご声援を賜ることができれば誠に幸いであります。

塾長　植本俊一

夢が、殻を破る

トヨタ自動車労働組合
井　上　正　勝

〔プロフィール〕

いのうえ　まさかつ（40歳）

- 1963年１月　名古屋市生まれ
- 1981年３月　中京高等学校卒(現中京大中京)
  硬式野球部所属
- 1981年４月　トヨタ自動車㈱入社
  高岡工場配属（主に海外生産部品出荷業務担当）
- 2001年９月　トヨタ自動車労働組合
  高岡支部副支部長
- 2002年９月　トヨタ自動車労働組合
  高岡支部支部長
  現在に至る

＜家族構成＞　妻　長女　二女　三女(双子)四女(双子)すべて女の子(四姉妹)

＜趣　　味＞　草野球、(今でも現役のつもり)、バドミントン、(30才から始めた)、キャンプ、登山(ハイキング程度？)

＜殻ってなんだろう＞

産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」と聞いた時、正直考えさせられた。「今までに、殻の外へ踏み出そうとした事があっただろうか」与えられた仕事を懸命にこなし、先輩や後輩達に支えられながら新たな技能・知識を身につけ、目標を達成し成長してきた事が、殻の外へ踏み出した事になるのだろうか。「そもそも殻ってなんだろう」

産政塾に参加して、改めて自分自身を見つめ直す機会を頂いた。

＜夢を描いた＞

私は、トヨタ自動車に入社し六年目に結婚、新婚旅行から帰って一週間後に「子供ができた」と妻から告げられ、少し早い気もするが順風満風の風に乗り幸せで平凡な家庭を築いていた。長女が誕生した翌々年次女が誕生し、そして翌年、「三人目？」と思ったら年子で双子の女の子誕生、我が家は一気に四姉妹の娘に囲まれ、パニック状態に陥った。お金のかかるゴルフからはきっぱりと足を洗い、会社と家の往復、休みの日には決まって一週間分の買い物と大量の洗濯物。自由になる時間も少なくなり、日々どうやって過ごしていたかわからない状態の生活を送っていた。壮絶な子育ても双子の子が保育園に入る頃にはひと段落、自由になる時間が少しずつ持てるようになった頃、若い頃に一度だけ見た事のある穂高連峰が見たくなり友人を誘い上高地に行った。

朝もやが残る神秘的な大正池、清く冷たい梓川のほとりをゆっくり歩くと、さわやかな風と共に穂高連峰が目の前に広がる。真っ青な空と残雪に包まれた穂高連峰は、あの若い頃に見た姿とまったく変わらず、梓川のほとりでのんびりと時を過ごした。遠くの山に目を向けると、小さな赤いものが見える。「あれは山小屋だろうか」さっそく双眼鏡を取り出し見てみると、確かに山小屋である。あの山小屋までなら自分でも登って行けるような気がする。「行ってみたいな～」ただ純粋に心の中で叫んでいた。

自宅に戻っても穂高の雄大さが頭から離れず、仕事帰りに雑誌や登山用品を扱っている店にたびたび出入りするようになり、見れば見る程穂高への思いが強くなっていった。雑誌によると、あの山小屋は岳沢（だけさわ）ヒュッテといって、そこから山頂を目指そうとすると急な登りで危険度が高く、経験者の同行が必要だという事がわかった。一般的なルートは、上高地から横尾を経て涸沢（からさわ）というルートがあり、本谷橋からやや急な登りとなるが、一般の人でも行けるコースだという事がわかった。

前穂高、奥穂高、北穂高へのベースキャンプ地となる涸沢は、壮大な穂高の山々に囲まれ大自然の真只中にあり、「一度でいいから、涸沢の地に立ってみたい！」「どうせ行くなら、涸沢にテントを張ってみたい！」と夢を描いた。

＜夢への準備＞

私と友人には山登りの経験がない。山登りの人口は年々増えていると聞くが、私の身近に山登りを趣味にしている人がいない。山を登る為には何が必要か。毎日、毎日、登山用品のカタログを穴が開くほど眺めながら、少しずつ揃えていった。革ではないが、雨に強い登山靴。自分の背中のサイズにピッタリで、腰で支えられるスタイリッシュなザック（リュックサック）。テントは、コンパクトで丈夫な現品限りの安価な掘り出し物を、仲良くなったお店の店員さんと相談しながら購入した。

家に帰ると、靴を履いてみたりザックを背負っては鏡に自分の姿を映したり、休みの日にはテントを張ってはロープのメンテナンスや防水スプレーを吹付けたり、毎日が楽しくて童心のような目の輝きと行動で、頭の中ではもうすでに穂高に登っていた。

歩くスピードや水分補給のタイミング、鎖場や雪上での歩行、テントの設営など、近場の山で経験を積んだ。荷物の軽量化を図る為、細部に渡り入念なチェックを行い、山では温度の変化が激しい為、汗をすぐに乾かす製品が良く、Tシャツや下着にまでこだわった。

＜家庭を置き去り＞

「よし、準備は整った、経験も積んだ、あとは実行あるのみ」と思った瞬間、家庭を置き去りにし

ている事に気が付いた。「おい、俺、涸沢に行くぞ～」と言っても当然妻は知らん顔。娘が話かけてきても、頭の中は山の事ばかりで話相手にもなっていない。子供四人、妻にはいつも苦労ばかりかけているのに、自分だけが夢に向かって走っている。「本当に行くの？」「安全な場所なの？」「経験者はいるの？」「会社は？」妻が心配する気持ちも分からないでもないが、さまざまな質問攻めに返す言葉もなく沈黙の日々が続く。「どうしたら家族の理解が得られるのだろうか」「仕事の整理が付いて休みが取れるのだろうか」「先立つお金は、どこから捻出すれば良いのだろうか」さまざまな難問が重くのしかかり「これは無理な計画なのだろうか」「実行するべきではないのだろうか」「夢で終わってしまうのだろうか」自問自答の日々が過ぎていった。

だけど、今しか出来ない事ってたくさんあると思う。「またいつか…・」で、今まで何度となく実現しなかった夢もたくさんある。やがて老いていく自分、健康である時にしか出来ない事もあるだろう。今行動しないと、何に対しても挑戦する意欲、活力が消えていくような気がする。ある施設に「真剣に考えると知恵が出る」「中途半端だと愚痴がでる」「いいかげんだと言い訳ばかり」と、貼ってあったのを思い出し、「よ～し、俺はいくぞ～！」と、前進する事に迷いを払拭した。

夢を実現させる為には、まずは家庭からと、今まで以上に家族サービスを考えた。週末の買い物は、妻から言われる前に積極的に行動。休日の一日は、妻の要望に殆ど応えた。ゴールデンウイークにはコテージ、夏の連休にはオートキャンプで家族と自然を満喫。とどめは、「俺が下見をしたら、今度

は一緒に登ろう」なんて、妻を説得。仕事も「山の為なら…」「休みをもらう為には」今まで以上に優先順位を付け「メリハリ・メリハリ」と勢力的に仕事に向かうようになっていった。そんな理解活動が功を奏したのか、徐々に妻の姿勢も緩やかになり、仕事も職場の理解を得る事ができ、いよいよ実行することになった。

＜夢に向かって＞

夢を描いてから三年後の夏、上高地から梓川を東に進み、三時間かけて横尾でテント泊。翌朝、横尾大橋から森林地帯を抜け本谷橋で休息、ここからやや急な登りとなり一瞬にして息が上がる。荷物も二〇kg以上あるだろうか、肩にずっしりと重く振られてしまう身体。歩いても歩いてもいっこうに見えない山頂、呼吸も段々と荒くなり、流れる汗を拭きながら、足下だけを見て歩くだけ。二時間程登っただろうか、かすかに涸沢ヒュッテらしき建物と旗が見えた。「もう近いぞ～」ここからは残雪が残っていて、滑らないようにしっかりホールドし、全身で息を整えながら一歩一歩慎重に足を進めたが、慣れないザックの重みに足が耐えきれず転ぶように座り込む。「あと少しだ」一人で登ってきた人に声を掛けられ、再び起き上がり最後の力を振り絞りながら一歩ずつ足をあげた。

大きな石段を登り、低い屋根の小屋の入り口に「涸沢ヒュッテ」と書いてある。「やっとここまで来たか」はやる気持ちを押さえながら石段を登ると、木で造られたテラスに売店、おいしそうにビー

ルを飲んでくつろいでいる登山客。細い路地を抜け石段の矢印に従って歩き、ふと顔を上げたら夢にまで見た光景が視界いっぱいに広がった。「これが涸沢か～」自然と足が速くなり小高い丘の上に立ち、荷物を降ろしておもいっきり深呼吸。軽やかで冷たい風を、身体いっぱいに浴び、澄んだ空気と静かさの中にそびえ立つ穂高連峰を、汗をぬぐう事すら忘れ目を思いっきり見開らいた。「信じられない、素晴らしい、声にならない」「俺達、今、涸沢の地に立っているのだ」「夢って描くものだな、叶うものだな」自分の夢に賛同してくれた友人に心から感謝し、家族の理解に感謝、そして大自然に感謝した。

七月の終わりだというのに残雪の上にテントを張り、夕方から降り出した雨がテントを叩き付ける。

夜半には雨も上がり満点の星空。安物のシュラフ（寝袋）だったせいか、寒くてほとんど眠る事が出来ず朝を迎えたが、太陽の光が山の頂上からゆっくりとカール全体に照らしてゆく姿は今でも忘れられない。この涸沢を我々が思い描く最高の地として胸に刻み、何度も何度も振り返りながら下山した。

そして翌年、涸沢をベースに奥穂高（標高三一九〇ｍ）に登頂する事ができた。

＜殻の外へ踏み出した？＞

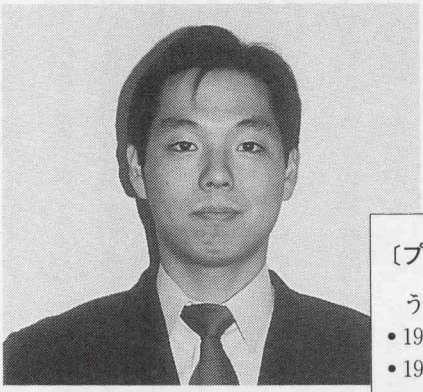
産政塾に参加し、「殻」について考えながら、さまざまな体験や話を聞かせて頂いた。我々のグループの企画でもある蓼科山登山では、山の気持ち良さや苦しさを塾生と共有した。ペンションのオーナーである伊藤さんからは、脱サラしてペンション経営した経緯、そして世界の山々や北極点到達のお話を聞かせて頂いた。「自然への挑戦は、自分自身への挑戦でもあり、山は人生そのものを物語っている」「墓をつくるより、一冊の本を残したい」と言った言葉は、今も印象に強く残っている。

振り返ってみると、知らず知らずのうちに自分自身を何重もの見えない「殻」で覆い、安心、幸せ、そして、平凡な人生を大切にしようとするあまりに、殻の外へ踏み出せない自分がいたと思う。この山登りの経験は、自分自身を取り巻く環境を打破して未知の世界に飛び込んだ事で、今思えば「殻の外へ踏み出した」と感じ取れる一瞬であったのではないかと思う。

本当の殻を破り外に踏み出す為には、強力なエネルギーとパワーが必要である。その源泉となるもののひとつに「夢」があり、その夢を追う勇気と行動が必要だと私は思う。「夢が、殻を破る！」自分自身で覆った「殻」を自分自身で打破する為、いくつになっても夢を持ち続けたいと思う。

産政塾に参加された皆さんには、大変お世話になり有難うございました。そして、其々の夢を持ち続け、共に殻の外へ踏み出しましょう！

産政塾を振り返って



中部電力労働組合
内　田　恭　介

〔プロフィール〕

うちだ　きょうすけ（31歳）

- 1971年1月　名古屋市生まれ
- 1994年4月　中部電力㈱入社
  長野支店茅野営業所営業課配属
- 1996年8月　三重支店用地部用地課勤務
- 1998年8月　本店用地部水利グループ勤務
- 1999年8月　中部電力労働組合　本店総支部
  本店第一支部書記長
- 2000年6月　中部電力労働組合　本部常任執
  行委員
  現在に至る

＜家　族＞　妻
＜趣　味＞　ゴルフ

「なにするところぞ？」そんな不安から始まった第十三期産政塾の活動も、あっという間に卒業を迎える事になった。半年間の活動を振り返ってみて何を得たのか具体的に示すことは難しいが、とにかくさまざまな人との出会いと貴重な体験が得られたことだけは間違いない。この貴重な経験を記録に刻むために、この場を借りて思いつくままに産政塾の活動史をつづりたいと思う。

（第一回）

全労済豊田会館での顔見せ会から今年の産政塾は始まった。あまり豊田市に土地勘が無かった私は午前中の仕事を片づけてから向かったのだったが、会場は予想外に遠く、初回から見事に遅刻をしてしまった。

企画立案では私の所属したBグループは一泊二日の行程を志望。やれ大阪の吉本興業だ、やれジブリの森だと夢は膨らみ、話のまとまりは悪かったが今後の産政塾活動がとても楽しみになった一日であった。しかしながら、このときの検討不足が後の「企画倒れ」に繋がることになる。

（第二回）

第二回は、緑ボクシングジムにお邪魔してのボクシングジム体験入門であった。おそらく産政塾に参加しなければ一生体験することのなかったであろう貴重な機会であり、自分自身の中では、実はこ

の企画を一番楽しみにしていた。

お邪魔してみてボクシングジムというのはやはり、一種独特の雰囲気が漂っていた。古い町工場を改築したようなトタン屋根の質素な建物が、ボクシングというストイックなイメージを増長させる。色のはげた板間に汗と血が染み込んでいるであろうリングが静かに広がっていて、まさに男の仕事場といった感じである。

練習ではトレーナーにバンデージを巻いてもらい、見た目は一丁前の練習生に仕上がったのだが、いざ練習が始まると中身はただの運動不足サラリーマンであることを見事に露呈してしまった。

練習を終えて、明日から体を鍛えようと固く誓ってジムをあとにしたが、そのあとの懇親会では脱水症状気味の体にビールが底なしに吸い込まれていき、ついつい飲み過ぎてしまったことは言うまでもない。

（第三回）

関谷酒造にお邪魔して、酒造りの工程を見学させていただいた。自分は日本酒がからっきし口に合わない体質なので、残念ながらできたてのお酒の味に舌づつみを打つことはできなかったが、ほんとうにおいしそうな笑顔を浮かべてごくごく飲んでいる人をみると、こちらまで幸せな気分になれた。

帰りのバスの中では人目もはばからず、後部座席でおみやげにもらってきたお酒をあけて小宴会が始まった。宴会は電車に場所を移し豊橋駅に着くまで続き、慰安会気分での楽しい帰路であったが、

周りから見ればはた迷惑な酔っぱらい集団に映っていたかもしれない。

（第四回）

イオンショッピングセンター見学であったが、業務の都合でやむを得ず欠席させていただいた。

（第五回）

第五回は常滑焼体験であった。文才・画才とにかく芸術センスにまったく恵まれてたいない私にとってははなはだ気後れする企画であったが、いざ陶芸を始めてみるとなかなか楽しく、不格好ながらもなんとか役目は果たせそうなビールグラスが完成した。焼き上がった自分の作品と対面したときには感動さえ覚えたものだったが、その作品も今は自宅で一度もビールをつがれることなく、行き場所を失っている。

それにしても陶芸家中野先生の粘土さばきには本当にびっくりした。ろくろの上で回転する粘土に触ると、土のかたまりがあっというまに花瓶に生まれ変わるのである。おそらくその域に達するまでには相当な修行を積まれたのであろうが、自分が極度の不器用であるだけに、無から形あるものを作り上げるその技に大いなるあこがれを感じた。

（第六回）

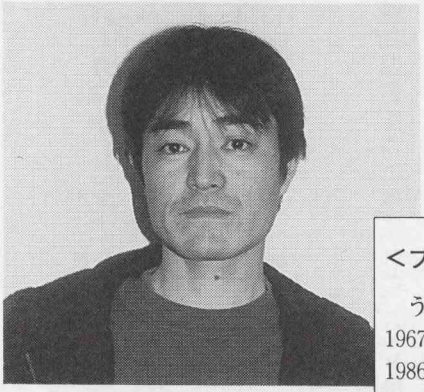
第六回は一泊二日で蓼科山登山を行った。わがBグループの担当企画であったが直前まで企画が決まらず、混迷の末結局当初予定していた大阪方面とは全く異なる登山企画と相成った。えいやで決めた企画であったが結果的にはいい宿にも恵まれ、山登りの苦しさと宿泊したペンションのオーナー伊藤さんの波瀾万丈な冒険人生の話を堪能した二日間となった。

（最後に）

産政塾を通じてたくさんの人に出会い、また日常ではあまり経験することのなかったであろう経験をする機会が得られたことは自分にとってとてもプラスになった。特に十三期のみなさんから聞いた様々な業界の話はとても興味深く、生産現場での組合活動や自動車づくりに関わる話、はたまたデパートの裏事情など、そうした何気ない会話が実はなによりも自分の視野を広げてくれた気がしている。

せっかくの出会い、十三期の皆さんとまたどこかでお会いできることを祈りつつ、筆を置くこととしたい。半年間ありがとうございました。

自分と家族



フタバ産業株式会社
梅　田　清　孝

<プロフィール>

うめだ　きよたか（35歳）
1967年　愛知県豊田市生まれ
1986年　フタバ産業（株）入社

（家族）　妻、長女、長男の４人家族
（趣味）　スポーツ、パチンコ

《はじめに》

産政塾もすべての企画が終わり、ついに来てしまったこの時が・・・。

文章を書くのが苦手で嫌いな自分が、「四、〇〇〇字」なんて書けるのだろうか？ましてや、テーマが自由だなんて、余計に難しい。でも、がんばって書かないと・・・。

「自分と家族」をテーマに自分なりの思いを書きたいと思います。

《幼 少 期》

昭和四十二年六月四日、愛知県豊田市に生まれた。父と母と兄の四人家族の中で、すくすくと育ち、わんぱくで親の言う事をきかない子供でした。この頃の遊びを思い出して見ると、ミニカーや、三輪車などで遊んだりしていました。

性格は、人の前に出ると照れて親の後ろに隠れてしまうぐらい「人見知り」をする子供だった様に思います。そんな人見知りをする性格は、今でもまったく変わらず、この性格は、この頃に決まってしまった様です。

《少年期・小学校》

小学校時代を振り返ると、あまり勉強は得意ではなかったので、学校に行くのがいやで行きたくないときも多々ありました。そんな中、特に給食の時間は、もっといやでした。何故かと言うと、かな

り好き嫌いが有り、特に肉が好きじゃなくて給食には肉が当たり前のように入っているからです。みんなは、全部食べているのにいつも残していた。そんな時、先生が「全部食べるまで、片付けてはいけない」と言うので一人残されて我慢くらべをしたこともありました。

遊びは、野球ばっかりしていたように思います。野球は大好きで、兄に教えてもらい、学校から帰ると近所の友達と空が暗くなるまでやっていました。

四年生の時、初めてナゴヤ球場（当時は、中日球場）に、巨人戦を家族で見に行ったことを思い出します。その日はあいにく天気が悪く今にも雨が降ってきそうな感じで、やはり練習を見ていると雨が降ってきて、練習を見ただけで試合は中止になってしまい、すごく残念でした。

もう一つ遊びで夢中になったのが、クワガタ獲りです。夏休みになると、毎朝四時起きで友達と獲りにいっていました。

小学校六年間は、こんな感じで過ぎていった・・・。

《少年期・中学校》

私が通っていた中学校は、校則が厳しく、それを違反したりするとすぐに叩かれたりするほど非常に厳しい学校でした。

振り返って見ると、三年間は、勉強と部活の毎日だった様に思います。勉強の方では、「朝学」と言うものがあり、朝七時から一時間みっちりと学習させられた。宿題も毎日の様に有り、その宿題を朝学の時間に学習するといった内容だったので、宿題をやってこなかったり、遅刻したりすると廊下

で正座しながらの学習で、とても辛い一時間でした。

夏休みや、冬休みの時は、嫌になるほど宿題が出て、部活の時にまで勉強の時間があったぐらいです。今思うと、この時に真剣に取り組んでいればもう少し違った人生だったかもしれません。

部活の方は、入学して部活を選ぶ時、第三希望まで選択出来て、「第一希望はバレー」「第二希望は野球」「第三希望は陸上」にし、みごと第一希望が通りバレー部に入部することになった。バレー部を選んだ理由は、小学校六年生の時にクラブ活動があって、その時にバレーをやって「なかなか面白い」と思ったから。

私は、身長が低かった為、バレーには不利。やりたかったポジションは、「アタッカー」でも無理でした。与えられたポジションは、「セッター」で、それも補欠でした。自分ではレギュラーになれる自信はあったけど・・・。でも一つはとりえがあるもので、サーブだけはみんなより優れていたように思う。こという時のピンチサーバーは必ず自分でした（少し自慢です）。部活は、とても辛く、大変だったけど中学校の生活の中で一番楽しかった様に感じます。

《少年期・高校》

私にとって一番楽しかったのが高校時代です。今の友達も高校時代の時の友達ばかりで、今でも家族で付き合っている仲間です。

このレポートを書く前に高校時代のアルバムを見て、なつかしい顔や、みなれた顔が並んでいて、みなれた顔は今とほとんど変わっていない。みなれた顔ということもある　が、卒業して十七年も

経っている様には思えない。アルバムをめくっていくと修学旅行の写真があった、高校時代の楽しかったことの一つである。次をめくると部活の写真だった。ほとんど帰宅部だったが、一応バレー部に所属していたのでアルバムには、バレー部として残っている。アルバムを見ていると楽しい思い出が浮かんでくる。

テスト期間中になると、テストが終わると下校になり、一応名目はテスト勉強とゆうことで、数人で集まり勉強をするがしばらくすると「マージャンやるか！」と誰か言うとそのままマージャン大会になってしまい、最後には、「パチンコ」ってこともあった。

よくこんなふうで卒業出来たと思います（マジで！）。

一番良かったのは、すばらしい友達に会えたこと、すばらしい先生に会えたことだと思うし、最高の高校生活だったと思う。

《青年期・社会人》

高校を卒業し、社会人として今の会社「フタバ産業」に入社した。研修期間を終え各職場に配属も決まり2ヵ月を過ぎようとしていた。仕事にもだいぶ慣れてきたときである。その日は、役員監査の日で仕事を始めて少したったとき「ケガ」をしてしまった。大変大きなケガで二ヵ月あまり会社を休むことになってしまった。今思うと、職場の仲間、上司の方々に大変な迷惑をかけたと思います。

そんなこともあり、二年目ぐらいに辞めたくて辞めたくて三日ほど無断欠勤もしたこともあった。あの時辞めなくて良かったと思います。

今は、良い先輩、職場の仲間にも会えてなんとかがんばってやっています。組合の活動も代議員、評議員と六年間させて頂き、海外セミナーでは中国にも行き、いろいろ勉強させて頂きました。これからの社会人としてきっと役に立つと思うし、がんばって行こうと思います。

《家　族》

私の家族は、妻、小学四年の長女、小学二年の長男そしてゴールデン・レトリバー（オス・三歳）のサンタ、M・ダックス（メス・七ヵ月）のリッツの四人と犬二匹です。

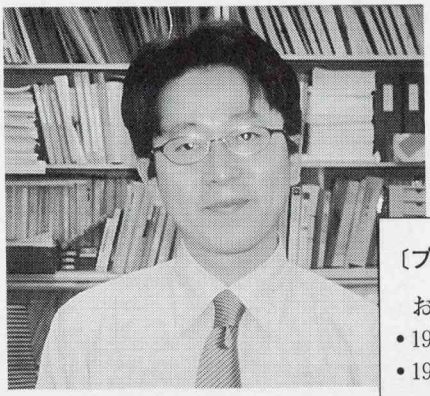
妻との出会いは、友達の紹介で知り合い今に至ります。早いもので、九月で十一年になりました。子供も元気で健康に育っています。ちょっと私の悪い所ばかり似てしまったのがショックですけど…。とりあえず「ごく普通の家庭」だと思います。私にとっては、一番気の休まる場所であることも間違いありません。これからも、健康に注意して笑いのたえない家庭を創って行きたいと思います。

《最　後　に》

今回、産政塾に参加させて頂きありがとうございます。産政塾で体験したことは、私にとって初めてのことばかりで、参加していなければたぶんやらなかったことばかりだと思います。産政塾のテーマ「殻を破ろう」は、私自身、まだ殻を破れていないと思う。これからじっくり考えて行きたい。

最後になりましたが、塾生のメンバー、事務局の安井さんいろいろお世話になりまして、ありがとうございます。いつか、皆さんにお会い出来る事を楽しみにしています。

『対　　談』



松坂屋労働組合
太　田　正　樹

〔プロフィール〕

おおた　まさき（30歳）

- 1972年５月　名古屋市生まれ
- 1996年４月　㈱松坂屋入社
  名古屋店ハンドバッグ・傘売場
  配属
- 1998年９月　松坂屋労働組合　名古屋支部書
  記次長
- 2002年９月　松坂屋労働組合　中央執行委員
  現在に至る

＜家族＞　独身

＜趣味＞　野球（観るだけ）、サッカー（観るだけ）、プロレス（もちろん観るだけ）
人間観察（じろじろ見るだけ）

「お昼の光景」

（司会者）みなさんこんにちは。『徹子の部屋』の時間です。本日は松坂屋労働組合で日々スケールダウンしています太田正樹さんにゲストに来ていただきました。

（ゲスト）こんにちは。

（司会者）太田さんは先日、「産政塾誌」に見事寄稿されたそうですね。

（ゲスト）はい。

（司会者）大変だったんでしょう？

（ゲスト）はい、大変でした。文章を書くなんて小学校五年生の時に、担任の先生の指示で無理矢理書いた読書感想文以来です。懲役一年、執行猶予五年の判決を下されたぐらいの苦痛でした。

（司会者）あら？小学校五年生以来なの？例えば大学の卒業論文は？

（ゲスト）卒業論文は書いていません。友達に三万円で書いてもらいました。そういうことって結構金で解決できるもんなんですよね。でもあんまり深く触れると大学時代の恩師に叱られてしまうのでこれ以上は話せません。

（司会者）あら…。大学時代は真面目に学業に励んでなかったようですね。

（ゲスト）はい学業はちっとも。そよ風に流されてしまいそうな生活を送っていました。

（司会者）どういうことですか？

（ゲスト）ふらふらしていたわけです。京都にいましたので、京都御所や鹿苑寺金閣、竜安寺といった名所に行って一日中飽きることなく、友達とつまらない話をしながらだらだらしていました。でも当時はそれはそれで満足だったわけです。

（司会者）〝ワル〟だったんですか？

（ゲスト）とんでもない。見ての通り非常にいい子でした。悪行は一切していません、というか悪さをしたくても気が小さくてできない子でした。僕は自分のことを昔から〝のび太くん〟に近い存在だと思っています。

（司会者）あなたの学生時代は何を目的に生きていたのですか？あなたの人生観が見えてこないのですが…。

（ゲスト）目的も人生観もありませんでした。「Blowin'In The Wind」って感じでしたかね。でもその時はその時で楽しかったんです。それに今思えば、学生時代は、ゆったりとした時の中で、自分自身と向き合う余裕があり、その中で「自分の存在の小ささ」に気づき、小さくても自分のことが好きであることを、自分自身が受け入れることができた時期でした。

（司会者）はあ…。

（ゲスト）簡単に言えば、自分のことが好きだってことです。

（司会者）要するに、「自己愛」の固まりなんですね。

（ゲスト）そうなのかもしれません。でも、自分のことが嫌いになることも度々あります。嫌いで嫌いでたまらなくなるのですが、ふと我に返ると、自己嫌悪に陥る自分も好きだということ

に気づいてしまいます。

（司会者）はあ…そうですか。あまり話が面白くないのでＣＭにいきましょう。

「コマーシャルがあけて」

（司会者）話を変えていきましょう。ところであなたがどのような経緯で現在の会社に入社されたのか教えていただけませんか。

（ゲスト）就職活動をしていた一九九五年は、バブルもはじけ、就職難といわれる時期に突入していました。別に何がやりたいというわけではなかったけれど、職にも就かずブラブラして、家族に迷惑をかけるなんてことはしたくはないと考えていました。資格も特技もなかったから業種・業態問わず、知っている会社を手当たり次第に受けるわけです。当然落ちますよね。不況の中、各社採用担当も必至で人材を集めます。適当な気持ちで試験を受けてくる奴なんて絶対合格させないと思うのが人情ってもんです。僕自身も受かる気もしなくなっていました。「一年くらい就職浪人してもいいかなあ」なんて諦めはじめたころ、唯一引っかかった会社がありまして、それが現在の会社でした。

（司会者）よかったですねえ。

（ゲスト）いえ、「この会社だまされている」と思いました。謙遜ではなく、よく僕なんかを入社させるなあと真剣に思っていました。でも、「入社させてもらえるなら入社してしまえ」て

な感じで入社することにしました。

（司会者）そんな気軽な気持ちで入社したら、入ってからが大変だったんじゃないの？

（ゲスト）百貨店の仕事がしたくて入社したわけではなかったから、最初の頃は何かと苦痛に感じることは多かったですね。仕事自体に興味が持てなかったし、お客様、上司、先輩、お局様といった人間関係がうざったく感じることもありました。でも慣れてしまえばなかなかいい環境だったといえます。

（司会者）と言うと？

（ゲスト）当社の人は怒るかもしれないですが、あまり脳みそを使うことがなかったからです。バカでもできる仕事が若手には要求されて、バカたれの僕にはフィットしたわけです。毎日大した仕事もせずに、毎月25日にはきちんと給料が入る。それでいて一部上々企業の冠もあり、恵まれたものだと感じていました。

（司会者）いい気なものですね。

（ゲスト）そうなんです。でもこれ以上話したら、会社批判と捉えかねないのでこの辺でやめときます。

（司会者）そんないい気な太田さんが、何でまた労働組合の専従になることになったのでしょうか。

（ゲスト）なぜなんでしょうか。当然自ら進んで専従になったわけではありません。先輩に勧誘されたわけなんですが、なぜ僕が勧誘されたのかすらもわかりません。僕の人生における七不思議のうちのひとつなんです。

（司会者）相変わらず労働組合専従になる経緯も精気が感じられませんね。

（ゲスト）断るほどの意地も能力も材料もなく、勧誘された以上はやってみようかな、ということで、粛々とお引き受けさせていただきました。

（司会者）あまり面白くない話でしたね。それでは、労働組合専従を引き受けてから現在にいたるまでのお話は、ＣＭを挟んでからにしましょう。

「再びコマーシャルがあけて」

（司会者）労働組合専従として、あなたはこの四年間どのように過ごしてきたのですか。

（ゲスト）いろいろありました。そう…、いろいろありました。まあ…、いろいろあったわけです。詳しいことは申し上げられません。人間関係はこれでも大切にしたいと考えておりますので。

（司会者）何があったのですか？どうお考えになりながら業務をされていたのですか？

（ゲスト）これでも以前に比べたら、少しは前向きになってきたのかなあと思います。ボートはオールを漕がなければ進みません。昔は水辺に漂っているだけ満足でした。水辺にいくことだけでも意義があると感じていました。最近は、例えうまく前に進まなくとも、とりあえずオールは漕いでみようかなという気持ちにはなっています。

（司会者）例えはへたくそでよくわかりませんが、労働組合専従になって「生き方」「考え方」が変

わって、少しは人間らしくなってきたんですか。

（ゲスト）他人から見ればそうでもないのでしょうが、自分としては変わってきている自分を感じています。いいことなのか、悪いことなのかはわかりません。あまり自分のことは興味がありません。自分のことは世界で一番好きなのですが…。

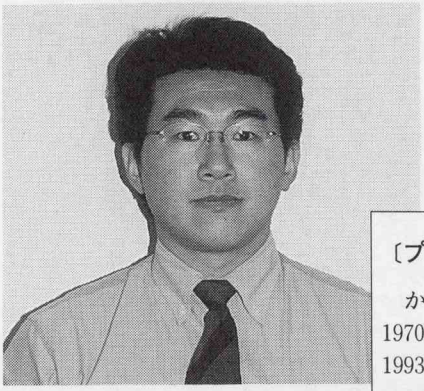
（司会者）結局は自己愛の固まりなんですね。

（ゲスト）そうですね。三十年間生きてきた結論はそんなところです。

（司会者）ありがとうございました。本日のゲストは、ぼんやり生きてきて、ご自身のことを愛して止まない松坂屋労働組合の太田正樹さんでした。それではまた明日。

自分の一生や半生を綴る奴なんてろくでもない奴に決まっていると僕は思っている。しかし、我ながら特に振り返ることのない人生を送ってきたようだ。でも、結構満足している。それでよいのではないかと思う今日この頃であった。

変わるってムズカシイ



デンソー労働組合
門　井　徳　孝

〔プロフィール〕

かどい　のりたか（32歳）
1970年５月　愛知県半田市生まれ
1993年４月　日本電装㈱（現㈱デンソー）入社
　　経理部配属
1999年９月　デンソー労働組合執行委員
2002年10月　㈱デンソー財経センター　へ復職
【家族】　妻、子供２人
【趣味】　映画鑑賞
　　使っていない子供部屋（５畳ぐらい）でリーズナブルなホームシアターセットでの鑑賞にはまっている
【夢】　大画面ＴＶと本格的ホームシアターセットを備えた広いプライベートルームを持つこと

＜「殻」とはなんぞや＞

産政塾に参加する多くの人が口にする言葉がある。「〝殻〟って何だろう？」「自分なりに〝殻〟を定義すると・・・」

昨年に引き続き「殻の外へ踏み出そう」というテーマの今年の産政塾も閉幕を迎え、改めて考えると確かに難しい。自分の殻ってなんだったんだろうか？少しでも外に踏み出せたのだろうか？

これを書き出し始める直前、ちょうど２００２年のプロ野球日本シリーズが巨人の４連勝という圧勝で幕を閉じた。（「なんでそんな時期に書いてんだ？」という関係者の声が聞こえてきそうだが・・・）幼いころからのＧ党としてはうれしいかぎりだが、少々あっけなかったかなという感は否めない。何もこれを読んでいる皆さんの神経を逆なでしようと思ってこんなことを書いているのではなく、ふと思い返せば、このシリーズの中にも色んな〝殻〟があったのではなかろうかと思えたからである。

ケガなどでシーズンを不本意なまま終わったＧ二岡選手。自分を育ててくれた原監督のためにという一心で３試合連続猛打賞＋文句なしのシリーズＭＶＰ。原監督の「彼も成長した」という言葉に「ひと〝殻〟むけた」と実感できたのではないだろうか？

見事胴上げ投手となったＧ河原投手。セリーグの優勝決定の時は、リリーフに失敗してマウンドを降り、敗戦後に胴上げというなんとも煮え切らない幕切れの演出をしてしまっただけに、心に期するものがあったと思う。普段は勝っても表情を変えない彼が、最後の打者を三振に打ち取った瞬間派手なガッツポーズを見せたとき、「失敗を糧にして〝殻〟を打ち破った」という思いが爆発したのでは

ないだろうか？

対照的なのがL和田選手。今年いきなりブレイクして、日本シリーズのカギをにぎるとまで言われたが、結局最後までヒットなし。シーズン中の大活躍で膨らんだファンの期待の大きさと、連日キーマンとしてとりあげるマスコミの扱いに、無意識のうちに自分の中に分厚い〝殻〟を何重にもつくってしまい、それを壊すために暗闇の中でやみくもにバットを振り回していたように見えた。シリーズ中に殻をこわすことはできなかったが、もし来年、この殻を破って出てきたときには間違いなく本物の脅威として立ちはだかることだろう。

他にも上原、阿部、松坂・・・あげればきりがないが、大きく分ければ「殻に気づいた人」と「殻から踏み出した人」がいると思う。チームとしても、つまづくことなくブッチギリでゴールを駆け抜けた西武と、けが人を全員でカバーし何度かマジックを消されながら苦労してたどりついた巨人。シリーズ前に〝殻〟を背負い破ってきたかどうかが、勝敗の分かれ目になったのではないだろうか？

もちろん、今まで書いたことも私が勝手に思い描いた「殻」であって、当人がどのように受け止めていたのかはわからない。結局のところ、冒頭にも触れたように「殻」といのは「ひとそれぞれに定義があるもの」であり、私なりに解釈すれば「これはマイッタ。どうしたらよいのだ？」と悩み「これはなんとかせないかん」と少しでも思えるものは全部「殻」ではなかろうか？

＜産政塾で見つけた殻＞

残念ながら1回だけ不参加となってしまったが、参加した回それぞれに見つけたものがある。

【第1回】「開塾式」

色々な人生を歩み色々な職種で色々な経験を積み重ねてきた人たちとの出会い。自己紹介で早くも見つけた。プライバシーの問題もあり詳しくは書けないが、ドラマや小説の中の話だとばかり思っていた人間模様が出るわ出るわ。当たり前と思っていた自分の平穏な毎日の生活が、とても貴重なものに思えてしまった。

【第2回】「ボクシングジム体験入門」

普段全くと言ってよいほど体を動かさず、おいしいものを心行くまで食べることに幸せを感じる自分にとってそこは、悪夢のようなトレーニングと減量を重ねてひたすら強さを追い求めるまさに非現実的な世界だった。殻より先に自分の体が壊れてしまったが、指導する側もそれを学ぶ側も純粋に何かを追い求めるひたむきさは私の曇った目には少々まぶしすぎた。自分を伸ばすための気持ちの持ちよう、人を伸ばしてあげるための観察力と相手にあわせた育成方法。特に育成という観点は、これから先会社生活を続けていく自分にとって、どんどん重要度が増していく分野だけに、基本的な心構えとして身に付けておくべきこととして非常に勉強になった。加えて、この回のレポート執筆もおおせつかり、読書感想文以外に長文作成をしたことのない私が、ない知恵と貧困なボキャブラリーからしぼりだしてやっとの思いで完成させたわけだが、その作品が意外にも公私の関係者に高評価を受けた。

「おしゃべりは下手でも表現力はすてたものじゃあない」と、いつのまにか〝殻〟を一枚破っていた自分に気がつき、ささやかな自信が芽生えたことも貴重な経験であった。

【第3回】「関谷醸造の酒づくり見学」

生まれつき酒に弱く、味の違いもさっぱりわからない私であるが、「おいしいお酒をできるだけ多くの人に楽しんでもらいたい」という純で熱い気持ちのいっぱい詰まった絞りたてのお酒を頂いたとき、正直しびれた（醗酵途中であたかもスパークリングワインのようであったからかもしれないが）。伝統を大切にするがゆえに、その伝統の味を常に高いレベルで提供しつづけるため、あえて近代化・効率化にも挑戦する。が、いくら最新設備にお金をかけたところで、職人の知恵と経験と技術がなければおいしいお酒は生まれない。自分の選んだ仕事に対する思い入れと、最高の成果を出すために何が必要なのかを見極める目と、それを実現する実行力。すべてにおいて自分は足元にも及んでいない。

【第4回】「イオンショッピングモールのお客様サービス戦略を学ぶ」

誰もが認める業界の勝ち組。その勝ち組たる所以は、やはりそのお客様第一主義の経営姿勢にあった。お客様が何を求め、何に喜んでくれて、どんな不満を持っているのか、まずは「声」を聞くことから全てが始まる。サービス業界の中では常識以前の問題だが、私の働く職場も相手が異なるだけで本質は同じだ。社内であっても仕事の相手は常に「お客様」という意識を忘れてはならない。改めて思い出させてくれた一日であった。

【第6回】「蓼科山を制覇」

〝自分としては〟最も殻が破れたのではなかろうかと思えたのがこの回。閉塾式を除けば、産政塾の「体験シリーズ」を締めくくる大イベント。ボクシング体験で体力のなさをいやというほど思い知らされた上、相変わらずの運動不足の中、生まれてはじめての本格？登山であっただけに、まともについてゆくことすらままなるまいと、正直参加自体どうしようかと悩んでしまった。が、プライベートで自ら登山に挑戦しようという気になる可能性を考えたら、〝殻〟を破るのにこんな絶好の機会はそうあるものではない、との思いで参加を決心した。塾生となる前であれば、何かしら理由をつけて「どうせムリ」と投げていたであろうことを考えると、レベルは低いが参加したことだけでまた1枚〝殻〟がやぶれたのではなかろうか。

実際に登り始めてほどなく、やはりそこには地獄が待っていた。人一倍重い荷物（＝体）を背負って、夢で見たらうなされそうな「これが道か？」という道を、杖も入れたらたった3本の足で2530メートルまで登る（スタート地点が2000メートル付近だったが）。すっかりお荷物と化した私を最後まで面倒見てくれた塾生U氏を見るたび、「自分に構わず先に行ってくれれば迷わず密かに下山するのに・・・」と不届きなことを何度も考えてしまうほどにマイッていたが、その度に「一歩一歩進んでいればそのうちたどり着く」と言い聞かせ、仲間が出迎えてくれる中、頂上に倒れこんだときは、なんとも言い尽くせぬ感動を覚えた。ガスが立ち込めまわりの景色はさっぱり見えなかったが、きれいごとではなく不思議と心の中は晴れ渡っていた。だが、それも頂上にいる間だけ。下山を始めたとたん、再び恐ろしい現実に引き戻された。経験のある方はお分かりだと思うが、登山より下山の

ほうがはるかに恐ろしい。体力も尽き果てただでさえフラフラな状態で、岩だらけの道なき道を駆け下るというイメージ。「気を抜いたら滑落もあるな・・・あの岩陰でニヤニヤしながら手招きしてるように見える黒い影はきっと死神だ・・・」

無事下山できたときに改めて思った。「ぜったい殻はやぶれたはずだ。そうでなきゃやってられるか・・・」

【第7回】「閉塾式」

産政塾を通じての自分なりの思いをみんなの前で語る。みんなそれぞれに個性的なスピーチを披露する中、これだけは共通していた。「自分の中で何かが変わった。」塾生になっていなかったら会えなかった人達、塾生になっていなかったらできなかった経験、ひとつひとつが自分を育てる肥やしになったはず。

＜自分の中では「プロローグ」＞

閉塾式をもって一応の産政塾活動は幕を閉じた。「塾を通じ貴重な財産を得ることができた。せっかくそのような経験をしたのだから、これからそれを肥やしにして少しずつでも自分を変えていかねば・・・」最後に殊勝なことを述べてから2ヶ月あまり。何か変わっただろうか？体型を気にしながらも、特に運動を始めるでもなく、職場異動により駐車場から職場までの徒歩での往復距離が4倍ほ

どに増えた程度。山に目覚めるでもなく、富士山の5合目まで家族ドライブをする程度。ひとつひとつ実際に体験した直後は、テンションの高さも手伝って「よっしゃ」という気になるが・・・。「熱しやすく冷めやすい」この体質・性質こそが自分のもっとも変えるべき〝殻〟なのではないだろうか？新しいものにはすぐ飛びつくが、しばらくいじって飽きてくるとすぐ次へと目を移す。これではまるで子供だ。奥さんにもよく怒られる。私はよく何かの映画で「大人になっても子供の心を忘れない人間は偉大だ」と言っていたのを引き合い出すが、間違いなく意味が違う。自分の周りで起こるあらゆる物事に純粋に反応して、興味を持ったらすぐにやってみる。気に入ったことにはとにかく集中してのめりこむ。こういった子供らしさが「偉大」の定義ではないかと思う。やめることは簡単だが、「気に入らないから」「面倒くさいから」「飽きたから」やめてしまうのではそれこそただの子供。かといって、興味もないこと、つまらなそうなことをムリに続けても苦痛なだけ。まずはひとつ「これは気に入った」と思えることを見つけることから始めなければ・・・。

ここまで書いてふと気がついた。「これって子育てそのものじゃん」

子供の成長を引き出すために大事なこととしてよく耳にするが、まずは何でも経験させてやる。そこから自分の気に入ったものをに力を注がせてやる。くじけそうになったときだけそっと手を差し伸べてやる。2人の息子を持つ父親としてはどうだったか？やはりここでも変わらなければ・・・。

元来がぶきっちょな私であるから、いくつも一度には土台ムリなので、「子供と一緒に色々やって

みる」ことから始めてみようか。親子で一緒に楽しめそうなもの、子供の成長を通じて自分の喜びとなりそうなもの、子供も自分も変われそうな一石二鳥の何かを探してみよう。構えすぎるとろくなことがないので、欲張るのはやめよう。親の変化に子供は敏感に素直に反応するから、変われたかどうかも計りやすい。

日本シリーズ優勝監督のコメントを借りれば、「私にとってはこれがプロローグ。これからが本番です。」

＜最　後　に＞

読み返すのが怖いくらいに、とりとめもない文章になってしまい、お恥ずかしい限りです。が、「読み返して手直しすればその分、思いにフィルターがかかってしまいかねない」という、もっともらしい理屈で勘弁してください。

短い期間でしたが、個性あふれる塾生の皆様と、それをまとめていつも明るく元気よく引っ張っていただいた事務局の安井さん、様々な経験を直に教えていただいた講師の皆様に、心からお礼を申し上げます。いつかＯＢ会？同窓会？でお会いできる日を楽しみにしております。

「夢」を大切に！

トヨタ車体株式会社
熊　崎　俊　哉

<プロフィール>

くまざき　としや（35歳）
- 1967年　愛知県名古屋市生まれ
- 1990年　トヨタ車体（株）入社
  富士松工場工務部配属
- 1995年　人事部（現人材開発部）へ異動
  現在に至る

<家族>　長女（９歳）、長男（６歳）
<趣味>　読書、ドライブ

1、はじめに

「殻の外へ踏み出そう」をテーマとした第十三期産政塾が閉塾して三ヶ月あまり。何か得たものはあるか？と問われても、具体的に「これ！」と答えられるものはない。しかしながら、今回経験した様々なこと、お話を伺った皆さん、行動を共にしたメンバーから得た「刺激」は、自分の中に少なからず影響を及ぼすであろう。

人生の半分を過ぎた今、今回の経験を機に、日ごろ漠然と思っているところをあらためて見つめ直し、これから自分として何をなすべきか考えてみたい。

2、最近思うこと

●ニュースや新聞で、「完全失業率五％突破！」だとか「若者が定職につかずフリーターが増える一方」といった記事をよく目にするようになってしばらく経つ。日本の経済が低迷を極める中で事態は少しも打開せず、むしろ悪くなる方向だ。「このままでよいのか」「政府は無策だ」と言っているうちにまた何年か過ぎそうである。こんな話ばかり聞いているとこちらまで気が滅入る。もっと楽しい話題や気分がよくなる話はないのか。

●自分の子供たちが成長していくのを見るにつけ、その将来が不安になってくる。この子らが大人に

なる頃にはどんな世界になっているのだろう。世間では環境対策やら高齢化対策やらと将来のことを考えてきているようだが、やはり今まで以上に幸せに暮らせるということはなさそうだ。では自分として子供たちに何を残してあげられるのだろう。国民全員がほぼ中流階級に位置し、集団の中において「モノ」としてのインセンティブを与えられない中では、少々昔かたぎにはなるが、「教え」とか「思想」といったことになるのかもしれない。

●近頃、モノの価値がどんどん下がっている。テレビ、ビデオ、ＤＶＤにパソコンといった高額と思われていた品物が、ディスカウントストアに行くとざっと十年前の三分の一の価格で買える。また、子供たちはテレビゲームや携帯用ゲーム（ゲームボーイ等）を誕生日やクリスマスでもない普通のときにねだって買ってもらう。買ってしまう自分も情けないが、「友達みんなが持っている」という殺し文句にはかなわない。簡単にモノを買い与えてしまうのはしつけ上よくないのはわかってはいるが。

●昔、ダンボールや贈答品の箱を使って遊んでいた記憶がある。くるまを作ったり、飛行機を作ったりと、それは楽しかった。今、自分の子ども達が同じように遊んでいる。「この箱頂戴！」と言っては、はさみやセロハンテープを駆使して形を作っていく。はじめは何ができるのかよくわからないが、それなりにできていく。子どもの創造力には驚かされる。

●出張で最近公共交通機関を利用した。中高生、大学生、社会人問わず、しつけがなっていない。駅のホームで床に直座りしたり、列車の中で大声でさわいだり携帯電話で喋ったり。昔は自分もああだったのかなあと思いながらも、やはり腹が立つ。でも一番腹立たしいのは、そういう輩をみても注意できないでいる自分。

●ここ一～二年で「英語」に関する本が爆発的に売れていた。会社内でもその必要性が急速に増してきそうだ。これも時代の波であろうから勉強していこうと思う。ただし、英語を習得するためには目標がなければうまくいかないだろう。なにせ、中・高・大と勉強してきても頭に入っていない。さて何にしよう。まずは楽しいことを考えて、リタイヤ後には外国で暮らしてみたい夢があるからそれに向かって勉強することにしよう。

●同時期に、「日本語」に関する本も多く出版された。日本語の持つ意味の深さ、美しさ、難しさを実感させられた。日本語に改めて向き合ってみると、「読むことはできても書けない」とか「読み書きはできても意味がしっかりわかっていない」ものが数多くあり、自分の語彙の無さに我ながら驚く。最近では漢字検定の受験者が相当増えてきているようだ。世間が英語、英語と騒いでいる中、まず日本語の勉強をしっかりすることも必要だ。足元をすくわれないように。

●「ハリーポッターシリーズ」が爆発的な人気だ。母子家庭の作者が生活に困窮し、電気代を節約す

るために近所のカフェで書き上げた物語である。本も映画もこれまでの記録を塗り替えて、全世界の子供から大人までを虜にしている。その魅力とは、物語の中に登場する数々の不思議な出来事や生き物そして魔法だと思う。はじめは本を読んで想像力を働かせていたが、映画でビジュアルに見るとその壮大なスケールに驚く。今のような先行きが見通せない世の中では、こうした物語が夢や希望を与えてくれる。次の作品が待ち遠しい。

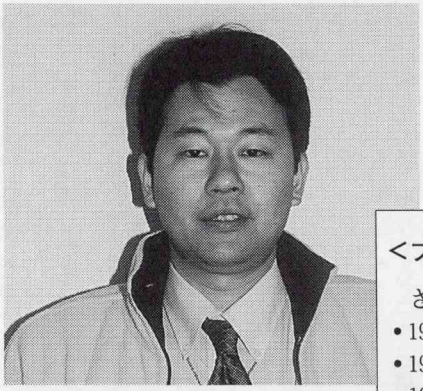
3、これからの自分

ここまで自分が感じるところをつらつらと思うがまま書いてきた。少々ピントが外れているところがあるかもしれない。ただ言いたいことは、今この見通しのない社会を作ってきたのは自分を含めた大人たちであり、これからの明るい未来を切り開き、次の世代にうまくバトンタッチするのも自分たちの役割なのである。責任は重大なのだ。古き良き時代を知った世代も、そんなことを知らずにきた世代も、懸命になってこれからをがんばらなくてはいけない。自分としても、しっかり役割を果たすために最大限の努力をしたい。そのために、自分としての目標をしっかり置いていくべきだ。その目標は、うまく表現できないがいわゆる「夢」なのだ。つねに「夢」を抱いて、それが現実になるよう努力していきたい。そうしたことが自分の行動を変え、きっとよい結果につながると信じている。子供たちもそんな自分をきっと見ていてくれるだろう。そしてきっと応援してくれるだろう。そして、その生き方を真似してくれたら本当にうれしい。

4、最後に

このような場でこんな稚拙な文章を書くことをお許し願いたい。ただ、今回産政塾に参加して「自分の殻を破った結果」がこれなのだ。自分として少しは変われたかもしれない。成長したかもしれない。と思っているのだが・・・。産政塾メンバーの皆さん、短い間でしたが大変お世話になりました。また、近いうちにお会いできる日を楽しみにしております。

「短パンに革靴な私」



アイシン精機株式会社
佐　野　智　弘

<プロフィール>

さの　ともひろ（29歳）

- 1973年７月　豊川市生まれ
- 1996年４月　アイシン精機㈱入社
- 1996年７月　人材・安全衛生部
  リクルートグループに配属
- 2001年１月　人事グループに異動
  現在に至る

<家　族>　妻１人　娘１人
<趣　味>　映画鑑賞

塾生の皆さん、お久しぶりです。
十三期の産政塾を終えるにあたり、私の参加したイベントを振り返りながら、産政塾での思い出についてお話したいと思います。（※題名と本文はあまり関係がありません。）

■第二回（三月二十日）

「実は一日中、靴擦れとの戦いであった。」

幼い頃に少林寺拳法をやっていたこともあり、もともと格闘技の類は好きだったものですから、緑ジム体験入学は、行く前からとても楽しみにしていました。

三班に分かれて、一ラウンド三分で、縄跳び、素振り、リング内でのステップをやったのを覚えていますか？自分は最初リング内でのステップ運動の班でした。でも実は、このステップ運動の最初のラウンドで、靴擦れをおこしてしまっていたのです。気合を入れておニューの運動靴を履いていったのが失敗でした。けっこう本格的な靴擦れで、リング内でステップをしていても、痛くて痛くて仕方なく、自分から積極的に内側へ内側へと円を小さくするよう働きかけていました。メンバーも疲れていたのか、円の直径が1.5メートルを切る瞬間が何度もありました。

当然、縄跳びも痛くてやる気が起きない。わざと足を引っ掛けて失敗し、時間稼ぎしながら三分が過ぎるのを待っていました。素振りをしていてもステップを踏むと靴擦れしていた左足が痛く、その

せいもあってか、ボクシンググローブがやけに重く感じました。普段は短く感じる三分が、まるでカップラーメンの出来上がりを待つ三分くらいに長く感じました。

とにかく靴擦れが痛くて、まともなトレーニングが出来ませんでしたが、環太平洋チャンピオンのピーターがパンチを打つたびにもらしていた「フン、フン」というあえぎ声が、やけに脳裏に焼き付いています。

■第四回（五月三十日）

「事業戦略よりクレーマー対策に興味があった」

岡崎のイオンに伺い「企業戦略を現地現物で学ぶ」というテーマだったが、私個人としては、そんなテーマよりも、普段見ることの出来ないショッピングモールの裏側を見られるということにワクワクしていました。

イオン見学で印象に残っている点は二つ。一つは、裏側の通路のいたるところに「創意工夫」の活動報告書が貼られていたことである。自社の工場では見慣れた風景だったが、まさかショッピングモールであるイオンの裏側で、こんなに盛んに「創意工夫活動」が行われているとは思わなかった。これには正直ビックリしたし、感心した。私の職種はいわゆる「事務スタッフ」になるが、事務スタッフの仕事においても、創意工夫の心をもって業務に取り組まなければならないと思いました。

もう一つは「クレーマー対策」。塾生の皆さん覚えていますか？質疑応答の際に、私がしつこいばかりにクレーマー対策について質問していたことを。

実は私、クレーマーに興味があるのです。クレーマー行為を行う人の気持ち、憤りを感じながらも、ぐっと堪えてクレーマーに対処する側の気持ち。絶対的に買う側が有利な立場にある中で、お互いにそれを知りながら、どう振舞うのか？とても興味があるのです。

話を聞いて思ったのは、やはりお客には勝てないということです。面白かったのは「相手の怒り度合いに応じて応対の仕方を変える」という点です。「怒った者勝ち」みたいな印象を持ちましたが、これは今後の私の人生において、良いヒントになったと思います。

■第五回（六月十九日）

「榎戸駅のその後・・・」

私たちのグループで企画した「千年の歴史、とこなめ焼に学ぶ」。私が書いたレポートの中で、常滑焼や、中野先生、安井さんの不器用さについてお伝えしましたが、実は今、とても気になっていることがあるのです。

それは、「榎戸駅のその後」です。レポートの際にも、何も無い榎戸駅にビックリしたとお話ししましたが、産政塾で榎戸駅を訪問した後、イナックス常滑工場閉鎖のニュースを聞いたのです。その

後の榎戸駅がとっても気になります。築百年の駄菓子屋や旅行会社も、常滑工場の従業員が主たるお客さんだったと思っているので、常滑工場が閉鎖された後の榎戸駅周辺が、どんな状態になっているのか（産業が成り立っているのか）気になって眠れません。「榎戸地方には地縁もなく、二度と行くことは無いでしょう」とレポートの中で言っていましたが、榎戸駅のその後が気になるので、今度時間をつくって、偵察に行ってみたいと考えています。機会があれば皆さんに報告したいと思います。

ちなみに、短パンに革靴で産政塾に参加したのも、この回からです。自分としては「カジュアルフォーマット」という新しいファッションのジャンルを確立しようと思って試みたのですが、塾生には思いのほか不評でした。ちょっと時代を先取りし過ぎたみたいですね。

■第七回（八月二十一～二十二日）

「健康プラザでの不健康な一晩」

この回は、閉塾式にも関わらず、仕事の都合で夕食会から参加しました。初日の午後に行われたディスカッションに参加しなかった時点で、何をしに来たのか分からないんですが、おいしいご飯を食べて、皆とお酒を飲めればいいかなと気軽な気持ちで参加しました。もちろん懲りずに「短パンに革靴」の格好です。野坂さんや水野さんが、しっかりとツッコんでくれたので、ちょっと嬉しかったです。

飯を食べた後、田中さんの部屋で飲みなおしたのですが、最後の宴会にふさわしく、産政塾のあるべき姿について立派な議論をしていた記憶があります。細かいことはあまり覚えていませんが、答えの無い議題について、皆で延々議論を交わし、結局三時くらいまで飲んでいました。ちなみに山本徹真さんは、一時くらいから床で寝ていました。

お開きになって眠い目をこすりながら部屋に戻り、そこからはとにかく爆睡でした。安井さんの事前説明では、翌日は基本的には自由時間で、健康プラザの施設を活用するも良し、帰るのも良しという具合でした。私の計画は、せっかく健康プラザに来たのだから、施設をフルに活用し、健康的に生活しようというものでした。しかし、翌朝、私が起きたのが十一時過ぎ、目覚ましは八時に設定したつもりなんですが、全く気がつかず、ただ唖然とするばかりでした。少し館内を回りましたが、塾生には誰一人会うことが出来ませんでした。皆さんは、翌朝、いったいどこで何をしていたのでしょうか？あれ以来、塾生の方々とは会っていないので全く分からないのです。結局、そのまま車で安城の自宅に戻り、着替えをして午後から会社に出社しました。

「健康プラザでの不健康な一晩」健康プラザをつくってくれた愛知県には本当に申しわけないですね。

■家　族

平成十四年四月に娘（長女）が生まれて、私の産政塾参加とともに、娘も成長してまいりました。十二月で八ヶ月になりますが、バタバタ動きまわったり、奇声を発したり、夜泣きしたりと、大変な

しかし、とても幸せな毎日を送っております。

つい二年前までは独身で気楽な生活を送っておりましたが、結婚し子供ができ、給与明細に「家族手当」なるものがついてしまうと、今まで感じたことのない「責任感」なるものを感じる毎日です。独身時代の自由時間は、めっきり少なくなりましたが、毎日仕事を終えて家に帰ると、部屋の明かりがついており家族が待っている幸せ、困り果てながらも、子供の世話をしている時間というものは、やはり嬉しいものだとつくづく感じております。産政塾での経験もさることながら、家族の存在が、私の内面に大きく変化をもたらしています。

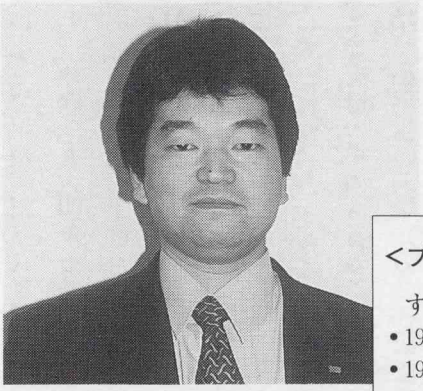
この気持ちをいつまでも大切にしていきたいと思います。

■最後に

終わってみれば、あまりに短かった八ヶ月間。塾生の方々との出会い、各回イベントを通じての経験、色々な意味で見聞が広まりました。「自分の殻を破れたか？」と言われると？マークが付きますが、産政塾で得られた経験を、今後の自分に生かしていきたいなあと真面目に思っています。

塾生の方々とは、たぶん仕事を通じて、またお会いする機会があると思いますが、その時はよろしくお願いいたします。今度お会いした時にも、「短パンに革靴」な自分でいられるよう精進し続けていきたいと思っています。

「今までの自分とこれからの自分」



トヨタ車体労働組合
鈴　木　定　晴

<プロフィール>

すずき　さだはる（38歳）
- 1964年　宮崎県出身
- 1983年　トヨタ車体㈱入社
  第43組立課に配属
- 2000年　トヨタ車体労働組合
  （ＢＷ）の専従執行委員となる
  現在に至る

〈家族〉　妻、長女（中１）、長男（小５）
両親
〈趣味〉　ドライブ、カラオケ

この世に生を受けて、長いようで早かった三八年。

簡単に自己紹介からすると、西暦一九六四年（昭和三十九年）十月三十日、宮崎県東臼杵郡という田舎に五人兄弟の四番目次男として産声を上げた。（と聞いた。）

西暦一九六四年（昭和三十九年）十月といえば、東京オリンピックが開催された月。東京オリンピックが開催されたからといって決してスポーツが得意なわけではない。（関係ないことでした。）物心ついた（というか記憶にある）のは、四歳ぐらいのときで、保育園に、当時は元気だった祖父が毎日、自転車で送り迎えをしてくれた。ことわざで、「三つ子の魂百まで」という言葉があるが、本当に、三歳までの魂は百歳まで記憶の中にあるのだろうか。

しばらくして小学校へ入学。小学校の入学式のとき記憶で、今でも覚えていることは、母が、私に向かって「お前の名前はどこにある。」といった言葉。しばらくして、自分の名前を探し当て、「これ」と答えたとき、母はうれしそうに誉めてくれた。今でもあの笑顔は忘れない。

その小学校生活の六年間、いろいろな記憶がある中で遊んだことの記憶はあるが、今思えば将来を考えて行動したことはあまり無いように記憶している。現在みたいにいろいろな遊び道具（ＴＶゲームなど）があったわけでもなく、ただひたすら外で駆け回っていた。強いて言えば、当時から自動車は好きだったということである。

中学校に入り、友達がいたということもあり野球部に入部した。これは自分から野球をやりたい、ということではなく、「みんながやっているので自分だけやらないわけにはいかない」という単純な発想でしかすぎない。誰かがやっているから自分もやる、というような発想は、最終的には自分で決

断したことではあるが、思いが無いと今になって思う。そんな中、中学校も終わりの三年生ともなれば否が応でも進学をどうするのかを視野に入れていかなければいけない。私は、小さい頃から自動車が好きだった、ということもあり工業高校を目指し、入学することができた。専攻は、機械科を選んだ。

高校時代は、普通の高校生活の傍ら、友達の進めもありラグビーを始めた。これもまた、中学時代とほぼ同じようなことで、最初から自分の意志でラグビーを始めたわけではない。嫌いだったわけではないが、目標がないがままただ漠然と三年間続けてきた。

高校卒業後、幼い頃から好きだった自動車に関連の会社ということで現在のトヨタ車体に入社できた。配属先は、組立課だった。入社当時は、社会人としての自覚もあまり無いまま言われる通りの与えられた仕事をこなす毎日だった。

しかし、自分が選んだ道だといっても簡単に仕事がやれた、というわけではない。入社一年目は、「自分は、本当にこの仕事をやっていけるのだろうか。」と何度も思ったことがある。

ところがある日突然、仕事が面白くなってきた。もっと言えば、「他の仕事もやってみたい」と思えるようになっていった。それはなぜかと言うと、自分の仕事に対して「自信」ということが付いたからではないかと思う。今思えば、今回参加した産政塾の言葉を借りて、自分の中で、「殻」の外に出た一歩だったのかも知れない。

入社から約二十年、今私は労働組合の専従執行委員という立場にいる。労働組合の役員は、言い換えれば、職場のリーダーでもある。リーダーというのは、誰かがやっているからとか、他の人が言うから、ということではやっていけないと思う。当然、独裁でもやれないし、単独でもやれない。先見

性を持ち、職場の意見をまとめ、リードしていかなければいけない、と思っている。

私の好きな言葉に「僕の前に道はない、僕の後ろに道はできる」という言葉がある。この言葉は、過去というのは変えることはできないが、未来、または自分のこれからの人生は、自分の意志や思いで変えれる、というか、作られる、ということではないかと自分なりに解釈している。

今回の産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」ということは、今までの人生を振り返り、これからの自分の人生がどうあるべきかを考えさせられる言葉だった。

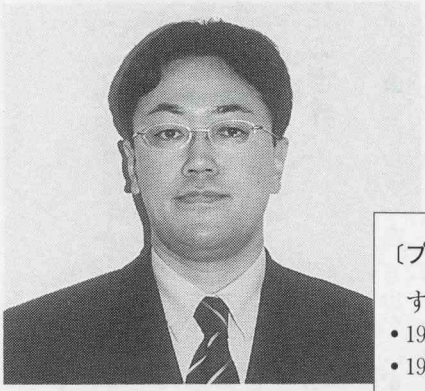
産政塾のテーマ「殻の外へ踏み出そう」から思ったこと。

- 自分に自信を持つこと。（そのためには、一部勉強もしなくてはいけないが・・・。）
- 固定観念を取り除き、好奇心を持ちチャレンジしていくこと。
- 目標を持ち、思いを持ってこれからの人生を生きる。

どう転ぶかはわからないが、悔いの残らないようにしたい。

最後に、産政塾に参加して多くの方と知り合うことができました。今回それぞれのメンバーが助け合いそれぞれのリーダーシップを発揮して企画頂いた内容に全部は参加できませんでしたが、また一つ殻の外へ踏み出す機会を与えて頂いたと感謝しております。また、今回産政塾を主催された事務局の安井さんをはじめ、中部産政研の皆様、参加の機会を与えて頂いた多くの皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

広がる世界



名古屋鉄道株式会社
鈴　木　　武

〔プロフィール〕

すずき　たけし（33歳）

- 1969年　愛知県名古屋市生まれ
- 1992年　名古屋鉄道㈱入社
  現場実習および関連会社への派遣研修
- 1995年　人事部配属
  現在に至る

＜家族＞　妻、長女（5歳）

＜趣味＞　読書、草野球、昼寝

＜はじめに＞

「殻の外へ踏み出そう」という産政塾テーマから私が連想したことは、「今自分のいる世界から一歩踏み出して、自分の知らない新しい世界に飛び出す」ことである。この12月で33歳になったが、今回は自分のこれまでの人生を振り返って、自分の世界がどのように広がってきたかを整理してみたい。

＜幼児期から学生時代の世界＞

今私には5歳の娘がいるが、彼女に見えている世界は家族と幼稚園の友達・先生がほとんどを占めており、毎日家族・友達と何をして遊ぶかが最大の関心事である。私も当然のことながら、その頃は友達・家族が全ての世界にいた。小学校、中学校、高校と進学しても、世界の大きさに違いこそあれ、同様の世界にいた。大学に入ってからは、アルバイトをして働くようになり、様々な人達と出会った。（彼女もできた。）

＜会社に入ってからの世界＞

会社に入ってからは、様々な年代の人達と一緒に仕事をするようになり、いろいろな考え方に触れた。自分の父親の年齢以上の方と酒を飲む機会もあり、仕事に対する考え方や人生について薫陶を

受けたりした。同じ年に会社に入った同期にも様々な経歴の持ち主がいた。100メートルの元日本記録保持者、棒高跳びで国体優勝経験のある者、書道の師範の免許を持っている者、神主の資格を持っている者など実に多彩であった。

人の出会いもさることながら、入社3年目には関連会社のスーパーに配属となり、種々の業務を体験をした。辞令をもらった次の日から白衣を着て包丁を持って魚をさばいていたのには自分でも驚いたが、真剣にスーパーの仕事に取り組んでみると実に奥が深く、気が付いたらその魅力にどっぷりとつかっていた。関連する書籍を読み漁り、職場で上司・先輩・同僚と議論をした。その時の経験から自分が興味を持って入っていく世界だけでなく、周りから与えられる環境であってもそれをポジティブに受け入れて真剣にぶつかっていくことの大切さを学んだ。

＜プライベートの世界＞

プライベートでは、27歳の時に結婚し、その1年後に子供も生まれた。自分の家族ができて、妻や子供の世界と円が重なり合うようになり、多くの人と出会った。さらにここ2年は住んでいる町で役がまわってきたため、仕事とは全く関係のない同じ地域に住む人々との付き合いが生まれた。

会社の同期が集まって始めた草野球も今年で6年目を迎えた。なかなかメンバーが集まらず、試合を組むのに四苦八苦しているが、徐々に同期以外のメンバーが増え、今では上は35歳から下は25歳まで広がっている。一緒に試合をする中でチームとしての絆が生まれ、会社の同期とはまた違った仲間

となっている。

＜産政塾に参加して＞

産政塾への派遣も自分の世界を広げる大きなきっかけとなった。何事にも積極的に前向きに取り組んできたつもりだったが、産政塾への派遣の話が出た頃は、人事部に配属されて8年目を迎え、日々の仕事に忙殺されて、目の前の仕事しか見えていない状況にあったと思う。「殻の外へ踏み出そう」というテーマはその頃の自分にぴったりのテーマであり、自分は今どういう殻を被っているか、どうしたら殻の外に踏み出すことができるか、今何をすべきかを真剣に考えた。2月から5月にかけては1年の中で最も忙しい時期であったが、「とにかく参加して体験してみよう」というのが私の答えだった。3月下旬のCグループ企画「体感ボクシング、男30代心身を鍛える」は参加できず、夜の懇親会のみの出席であったが、その後の企画については全て出席し、様々な体験をした。

4月の自分の所属するDグループの企画「伝統と革新の融合、その戦略を探る～酒蔵『関谷醸造』杜氏遠山久男氏を訪ねて」においては、杜氏の遠山さんの酒造りに対する熱い想い、低迷する日本酒市場で勝つ戦略をお聞きした。5月のAグループ企画「イオンの企業戦略を現地現物で学ぶ」では、厳しい状況が続く小売業にあって最高益を記録しているイオンの戦略をCSという切り口から垣間見た。6月のEグループ企画「千年の歴史、とこなめ焼を学ぶ」では、以前からやってみたいと思っていた作陶を体験した。自分が当初イメージしていた物とは全く別の作品になってしまい、自分の不器

用さを思い知らされた。（その後、8月の閉塾式で自分の作品と対面したが、意外な仕上がりに驚き、感動した。）そして7月は最後のBグループ企画「日本100名山、蓼科山（2530m）に挑もう！」にいたっては、久しぶりに山登りを体験した。9：30に現地集合という想像を絶するスケジュールに驚き、Bグループリーダーの水野さんが前泊したのに登らないことに驚き、野坂さんと宮城さんの登山スピードに驚き、オーナーの伊藤さんの北極圏走破の話に驚き、田中さんの酒の強さに驚くなど、数々の驚き体験をさせていただいた。

閉塾式の行われた愛知健康の森では、夜中までみなさんと飲んで語り合い、様々な考え方、価値観に触れることができた。各企業から派遣され、それまで縁のなかった人々が、大いに集い、お互いの仕事や考え方、そして人生を語り合う、このような素晴らしい時間を共有することができることが産政塾の一番の良さだと実感した。

今回の産政塾の活動を通じて、新しい人々と知り合う喜び、自分の知らない世界を体験する楽しみ、そして仕事を離れて付き合える友人を得た感動を味わうことができた。これからの人生においても様々な人々との出会いを大切にして、自分の世界を少しずつ広げていきたいという思いを強くした。

＜最後に＞

事務局で大変お世話になった安井さんをはじめ、第13回産政塾の20名（デンソーの北村さん含む）の塾生のみなさん、本当に楽しい充実した時間をありがとうございました。そして、今後ともよ

ろしくお願いいたします。最後にDグループのリーダー多和田さん、熊崎さん、そして中川さん、いたらないメンバーでしたがいろいろとありがとうございました。また、大いに飲んで食べて語りましょう。

山　　行

株式会社豊田自動織機
田　中　亘　人

<プロフィール>

たなか　のぶひと（36歳）
1966年　東京生まれ
1989年　株式会社豊田自動織機入社人事部配属
　　現在に至る
<家族>　妻、長女（5歳）、長男（3歳）
<趣味>　本文から類推願います

山に親しみ始めたのは、小学生後半の頃からであったと思う。当時、埼玉県の川越という街に住んでいたので、登る山域は奥武蔵、秩父といった辺りであった。

週末になると友人を募って、頻繁にその山域に足を運んだ。もちろん日帰りのハイキングといったレベルのものではあったけれど自分達だけで山行計画をたて実行する楽しさを学んだ。その後、山形県の鶴岡という街に住むことになったが、近くに月山、羽黒山といった世間でいうところの出羽三山や、鳥海山という名峰があったにも関わらず、山に登る事はなかった。良くは思い出せないが、きっと他に面白い事が沢山あったのであろうと思う。

大学に入学したとき、ミニサッカー（フットサル）のクラブと山登りのサークルに入会した。不遜な言い方かも知れないが、大学の授業が思ったほど面白くなかったのと、高校に比べると自由になる時間が飛躍的に増えたので（これは正しくないかもしれない。自分で勝手に飛躍的に増やしたといったほうが正しいであろう）何かやろうかということであったのであろう。新人歓迎の一回目の登山は私が入学した大学のある仙台近郊の低山に一泊二日で行くというもので、私にとっては楽なものであった。サークルの〝最初からきついところに連れて行って辞められてはかなわん〟という意図が大変分かりやすく示された山行であった。

さて、充分にお客様扱いをしていただいた後は、夏山合宿に向けて山行のスタイルが徐々に変わっていった。大体、日本という国は六月に入ると梅雨という気象現象が起こることになっているが、そんなことにはお構いなく山行は続けられた。雨の降る中、荷物を背負って10時間以上歩いたことのある方はそうはいないと思われるので、そのような際の心情はなかなか理解していただけないと思うが、

〝何故に、雨の中重い荷物を背負って歩かなければならないのだ〟と思うのが通常の感覚であろう。夏が近づくにつれ山行のスタイルはさらに変化し、朝、テントをたたんで〝さあ出発だ〟という際に、先輩のザックから体重計が出てくるようになってきた。我々の健康状態を気遣って持って来た訳ではもちろんない。我々はテント場周辺をうろつき、これはという石（出来るだけ角が少ない形状で大きさの割に重いものが好ましい）を探して、自分のザックに入れるのである。そして、そのザックを体重計に乗せるのである。重さの目安は大体35kg程度であったであろうか。何だ、そんなものかと思われる方は一度背負ってみることをお勧めしたい。これくらいの重さになると背負うのにはコツがいる。一度膝の上にザックを載せてから腰をそのザックの下にまわし入れるようにして背負うのである。我々新人の多くは上手く背負えずにザックに振り回されて尻餅をついていた。この風景を見て〝ザックの舞〟などと呼んで喜ぶ先輩もいた。そぼ降る雨の中、35kgのザックを背負って10時間近く歩くのは、経験したことはないが、僧侶の行に近いものがあるのではないかと思う。何しろ、山登りの楽しさの一つである風景は全く見えないし、体中雨に濡れて冷たいし、疲れるし、楽しいことは何もない。こういう場合、私は頭の中で気に入りの歌を繰り返し歌ったり、色んな事を考えながら歩いていたことを思い出す。ただ、何を考えていたかは今となっては思い出せない。きっと他愛も無いことだったのであろう。そういえば、楽しいことが一つだけあった。多少、体力に余裕がある数名で歌を歌いながら歩くことである。フォークソングから山の歌、歌謡曲までその山行の面子によって歌の傾向は微妙に変わったが、とにかく多くの歌をこの時に覚えたものだ。山行終了地点に着くと石をザックから取り出すのであるが、石を取り出した後は空を飛ぶような感覚で歩けた事を良く覚えている。

この石を背負った山行をする意味合いが身に沁みて分かったのは夏合宿の初日であった。梅雨明け直後で、山行としては、数ヶ月振りに晴れ上がった7月下旬のある朝、私は飯豊連峰という山塊の麓のキャンプ場にいた。背中には1週間分の食料、装備を満載したザックがあった。ザックの高さは背負ってみると頭の高さを遥かに超えるものになった。わたしは容量が75リッターのバルトロというザックを使用していた。このザックを選んだ理由はザックの口が大きく作りがシンプルでパッキング（荷物を詰めること）がし易いからという単純なものであったが、後に私のザックはうわばみザックと呼ばれるようになった。これは決して私が酒飲みだからということではなく、規定の容量以上にものが入ることが判明したからである。しかしながら、テント本体を持たされていたこともあるがそのザックをもってしても全ての荷物が入りきらず、ザックの両脇にタッシュという荷物入れを着けて登る事になった。重さもかなりあったと思うが、石山行を数度経験したお陰で大きな不安感を抱くことなく登り始めた。我々のパーティの初日のルートはいわゆる鉄砲登りと呼ばれるもので、大きなアップダウンがなくひたすら尾根まで登り上げるというものであった。鉄砲登りは行程が2～3時間程度であれば高度が稼げるため良いが、これが丸1日となるとやはりきつい。飯豊南下パーティ（我々のパーティ名）の合宿が成功するか否かは初日にかかっていると合宿前に他のパーティ員から言われていた。登山は早朝出発が原則で、夏は2時起床、3時までに食事を済ませ4時に出発というのがルールだった。これをニサシと呼んでいた。秋になるとこれがサシゴになり、場合によってはシゴロになることもあった。（社会人になってからは、基本的にシゴロで、二日酔いの際はゴロチなんてことも珍しくない体たらくである。）そういう訳で出発直後はヘッドランプを頭に載せての行動なので、大

変涼しく快調であった。樹林帯を抜け、夏の日差しを直接頭に受ける頃からが地獄であった。いわゆる無風快晴という天候で湿度も高く、我々は徐々に衰弱していった。途中に水場がないため、一人2リットル以上の水を担いでいたが、炊事用、緊急用以外の行動中の給水用の水は急速になくなっていった。休憩時間も徐々に長くなり、到着時間は予定よりかなり遅れていた。歌を歌うどころか、頭の中で何かを考えるといったことも困難な状況になってきていた。それでもパーティは歩みを止める事はなかった。皆、無言で足元を見つめて歩いていた。やがて陽が傾きだした頃、稜線近くの湿原に着いた。そこからはこれから一週間歩いていく飯豊の山々が遥か彼方まで見通せた。たおやかな山容であった。指呼の距離に山小屋とテント場が見えた。大きな安堵感と充実感、達成感が体を包み込んだ。パーティ員同士、先輩、後輩関係なく抱き合い、握手を交わした。

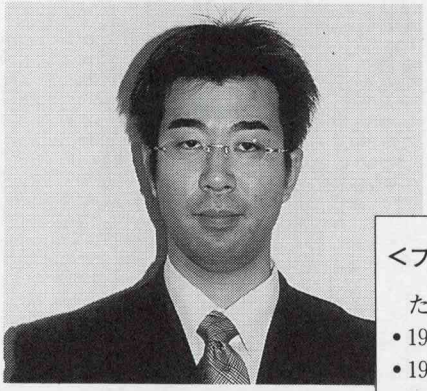
あれから10数年が過ぎ去った。あの大学1年の飯豊連峰を一週間にかけて渡り歩いた山旅の後も、私は数多くの山々に登ってきた。その山々とは標高3000メートルを超えるような山や、風雪に行く手を見失いあえなく撤退した山や、道なき山中を1／25000の地図とコンパスを頼りに歩いた山や、目には見えない、しかし当時の自分にとっては大きな山だったりした。そしてそれらの山を何とかかんとか、乗り越えて来た。ふと気が付けば、いつの間にか自分の身の周りについているモノも増えて来た。それは自分自身の怠惰な生活の結果としての贅肉であったり、現在の私を支えるかけがいのないものであったり色々である。これから何年今のような生活をしていくのか分からないが、今後も私の前には大小様々な山が現れてくるであろう。出来得ればそういった山々を越えた後、かつて体感した感覚をもう一度味わえればと思う。そしてその山が大きければ大きいほど、乗り越えること

がきつければきつい程、その可能性が高いだろうことは経験上充分に知っている。

ここ数年、山に登っていない。私のかけがいのないもの（もちろん贅肉ではないほうである）が山より魅力的であるからである。かけがいのないものの内、一人を除いては山に連れて行くには小さすぎるというのもその理由として挙げられるであろう。仕方が無いので、山岳雑誌や山行本、紀行本を読む事で気を紛らせている。いつの日にか、私の山の友人達やその家族と山に登りたい。私の後ろにはここ数年私の身の周りに現れたもの達が付き従い、テント場についたら（断じて山小屋ではない。かつぎあげたテントを立て、そこに泊まるのである。）私が食事を調理する補助をしてもらい、皆で美しい周囲の山々の風景を眺めながら食事をする。もちろん私は酒を飲む。山々と私のかけがいのないもの達を眺めながらじっくりと飲む。格別の味であろうことは間違いないであろう。その時が楽しみである。

但し、私のこの望みが実現するかしないかは大きな問題ではない。忙しく過ぎ行く日々のあるふとした瞬間にそういうことを思うことが重要なのである、と勝手に思っている。

「Nice to meet you!」



豊田市役所
福祉保健部保健衛生課
彡和田　光　紀

<プロフィール>

たわだ　みつのり（30歳）

- 1972年４月　豊田市生まれ
- 1997年４月　豊田市役所入庁
  福祉部健康課配属
- 1997年５月　愛知県豊田保健所に派遣研修
- 1998年４月　福祉保健部生活衛生課（現・保健衛生課）配属
  現在に至る

<家　族>　独身

<趣　味>　ドライブ、アウトドア、お酒

《はじめに》

仕事中、突然上司から「人事課から産政塾といった異業種間の面白い研修があるけれど、良かったらどう？」、さらに「毎回懇親会が催されて、お酒もたくさんの飲めて楽しいらしいよ。」との一言で、間髪いれず了解したのが始まりでした。この誘いがあったのは開塾式の一週間前の事でした。また、課長からは「メンバーを見てみると凄い奴等ばかりだから、実際は違うけれども市役所の代表だと思って負けないように頑張ってこい！」と気合を入れられつつ、小心者の私はビクビクしながら開塾式に向かったのでした。

開塾式での自己紹介は普段大勢の前で話す機会が無い私にとって大変苦痛な事でした。これは閉塾式の時も同じでしたが。皆さんが堂々と話されるなか、緊張しながら話していて自分で何を言っているか良く把握できずにいたのを覚えています。

しかし、懇親会の席になるとお酒の魔力によって元気になり、無事、他の塾生とも打ち解けることが出来ました。

そして産政塾を通じて様々な方と出会うことができたが、これからは私自身のこれまでの出会いについてとめどなく綴りたいと思います。

《私の生誕の秘密》

まず、私の誕生日には実は秘密があったのです。これは今から十年程前に出生にかかわる重要な証言により判明したのです。それは、私の誕生日は四月二日なのですが、大学の友人と話していると、「様々な事情により三月末に生まれても学年が変わる四月二日生まれで出生届を出す事が少なくない」との事でした。そしてその事を自宅に帰り食事中に母に冗談ながらその話をすると、急に真面目な顔になり、その時初めて誕生日が違う事が判明したのです。また、その時に本当の誕生日は聞いておらず、今でも不明なのです。

よくよく考えてみれば、私はいきなり人生の岐路に立たされていたのです。たまにひとつ学年が上だったらどんな人生だったのだろうかと考える事もあるのですが、考えても解かるわけでも、戻れる訳でもないので、その都度「この人生が一番に違いない」と自分に言い聞かせているのです。まあ、お蔭様で産政塾との出会いがあったとも思います。

《薬　剤　師》

薬剤師を目指したのは、中学のときに叔母の薬局に遊びに行った時に、「いい暮らしをしているな。」とふと思いたった事がきっかけでした。一時は医者になる事も人の命を救うといった達成感があるので考えたのですが、学力不足、学費問題（特に私立大学は不可能）などの現実的な理由から諦めて、まあ、薬剤師なら調度適当なところだと思い目指したのでした。今思えば結構いい加減な考えが大学に入るまでよく続いたと思います。

卒業後、一年間は大学に籍を置きながら病院で研修を行っていた時は、普段は薬局での調剤をせずに病棟にいて患者さんと接して服薬管理指導を行っていました。服薬管理指導というのは、患者さんが服薬している薬の飲み方、効果、副作用などの説明から、副作用が出やすい薬を服用している患者さんの薬物血中濃度の管理などを行っていました。

そのときの体験でもありましたが、マスメディアの力、特にテレビの影響は物凄いものだと痛感しました。お昼に放送されている某司会者M氏の番組には頭を悩ませたことが度々ありました。「納豆は血液をサラサラにする効果があるのですよ。」「ガン予防には一日二リットル以上の水を飲まないといけないですよ。」などと入院中の患者さんを虜にしていたのです。しかし、患者さんの中には納豆と相性が悪い薬を服薬していたり、高血圧症で水分摂取制限を受けている場合があるので、「薬は普段は毒（又は異物）だけれど、あなたの体は今普通では無いから薬を飲んでいるのです。テレビで言っていることも、健康な人のことで入院している貴方にはすべてが当てはまる訳では無いのですよ。」と説明して患者さんに納得してもらいました。あの番組（司会者M氏）は今でもよく告発されないなとつくづく思います。

また、患者心理として良い治療を受けるのに医療従事者に良い印象を持たれたいといった傾向が見られ、その為に薬を飲み忘れても飲んだように答える事も度々ありました。患者さんすべてが正直に物事を言うとは限らないので、その人の目線や仕草でどう思っているか察することが必要になるのですが、これは鍛錬が足りなりため、深読みし過ぎる事もしばしばありました。これは今でも判断を鈍らせる原因となることもあり、ある意味、中途半端な技術を身につけてしまったと少し後悔していま

す。

私がいた循環器病棟では、六十歳以上の高齢な方が多く入院されており、様々な人生経験をされた方の話は非常に興味深いものでした。特に何か普段できる趣味を持って人生を送っている人は、実際の年齢よりも若々しい患者さんが多いが、仕事一筋で頑張っている人のほうが老けているように見えるのでした。私自身、趣味でドライブ、アウトドアはそんなに頻繁に出来ず、毎日出来るのはお酒を嗜むぐらいなので、何か普段出来る簡単な趣味でも探してみたいものです。

《お　酒》

まず、お酒とのファーストコンタクトは、十歳夏の時でした。（既に時効ですので隠さずに書きますが・・・。）暑い時に親父が美味しそうに琥珀色の炭酸飲料（ビール）を飲んでいるのを羨ましそうに見ていたら、一杯勧められて飲んだのが劇的な出会いの始まりでした。正直苦いなと思いながらも、コーラやソーダ等の炭酸飲料が好きだったため、それ以降親父の晩酌に付き合う事が度々ありました。今になって思えば、親父は息子と酒を飲んで少し満足そうだった様な気がします。

それから大学に入りお酒と接する機会は増していきました。大学ではバレー部に入ったのですが、コンパは体育会系そのもので、毎回、寿司の桶に日本酒を注がれて一気飲みしていたため、日本酒の印象はコンパでの苦痛の味でした。そんな中、叔父さんが持ってきた日本酒がある変化をもたらしました。その日本酒とは、「蓬莱泉　純米大吟醸」でした。当時はまだ「空」の名称が無かったようで

した。当時十八歳のガキが飲んでも、あの米のほのかな甘さ、そして喉越しの良さが十分に伝わってきました。

そんな印象が強かった事もあり、我々dグループの企画は「関谷醸造訪問」で行われました。この企画は私と名鉄の鈴木さん及び事務局の安井さんの強い要望により企画されたといっても過言ではないが、単にこの三人が酒飲みだからと言うだけでなく、関谷醸造の酒蔵らしからぬ姿勢（コンピューター化、機械化）に学ぶところがあると思い企画した事を付け加えておきます。しかし、火入れ前の若々しい微発泡性の日本酒は酒蔵でしか味わえない酒でした。

また、お酒が取り持つ出会いも多かった様に思います。特に国立公衆衛生院（現・国立保健医療科学院）で一ヶ月微生物検査の研修した時には、毎日飲み歩いていたため、年齢性別は様々な研修生ですが、現在でも交流があり公私にわたり良い関係が続いています。最近では、東北への一人旅の途中に研修生の自宅に食事に伺ったりした事もありました。今回の産政塾でも同様に、普段内向的な私としてはお酒の力無しには、ここまで交流を深める事は出来なかった様にも思えます。

《最　後　に》

そして、産政塾第十三期生徒の出会い。冒頭に課長が言われていたように、バイタリティが溢れ、かつ、冷静な本当に凄い方々ばかりでした。皆さんに乗り遅れないように必死にしがみついて塾をすごしてきましたが、力みすぎて羽目をはずす事（特にお酒の席で・・・）もあり、ご迷惑をおかけす

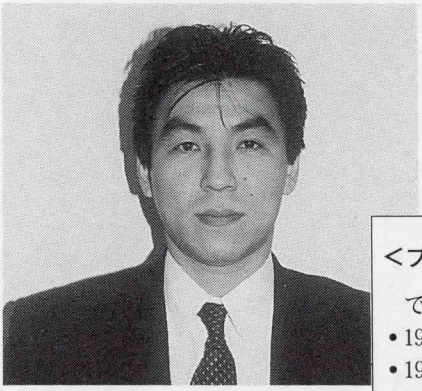
る事もしばしばあったと思います。

また、皆さん仕事に対してそれぞれ信念を持って前向きに取り組まれている事が、普段の会話を通じて、ひしひしと感じられました。私自身もそれなりに仕事に対して取り組んでいたつもりでしたが、産政塾との出会いが、その甘さを痛感する良い機会でした。

最後に、今回、産政塾に参加して様々な講話並びに体験を通して、自身の見聞を広めることが出来ました。この貴重な経験を大切にして、今後の活動に活かして行きたいと思います。

安井さん、第十三期塾生の皆さん、事務局の皆さん、講師の先生方、誠に有難うございました。十三回目の産政塾の活動は終了しましたが、今回の出会いは切磋琢磨できる仲間であり、今後も裏産政塾として様々な活動をしていきたいですね。

いつまでたっても殻の中



全トヨタ労働組合連合会
出　口　隆　浩

<プロフィール>

でぐち　たかひろ（35歳）

- 1967年６月　石川県生まれ
- 1986年４月　愛三工業㈱入社
- 1996年10月　愛三工業労働組合執行委員
- 2000年９月　全トヨタ労働組合連合会へ派遣
  現在に至る

<家　族>

妻・長男・長女

<趣　味>

お酒（ビール・日本酒・焼酎、なんでもＯＫ）

『殻ってなに？』

「殻の外へ踏み出そう！」が産政塾のテーマだった。ここで言う「殻」とは何なんなんだろうと改めて広辞苑を開いてみた。「①外部を覆っている固いもの。外皮。比喩的に、自分を外界から隔てるもの。また、その内的世界。②内部の空虚となった外皮。あきがら。もぬけのから。ぬけがら。③魂の去った身。なきがら。むくろ。死骸。④豆腐の滓（かす）おから。」と記述されていた。さらに「―を破る・・・新しいことの妨げになっていた、古い考えや習慣を打破する」とあった。なるほど、これまでの人生の中で、自分の「殻」というものを真剣に考えたことがあっただろうか。多少は意識したことはあったかも知れないが、その「殻」を破ろうと考えたことはなかったような気がする。

産政塾がネライとするところ・・・業種や職種、置かれた環境や立場の異なる同世代の仲間が集まり、日常の会社生活や家庭生活では経験することができないことをみずからが企画し、実行する。そうして得られた体験や刺激から、新たな自己発見による人間的成長を遂げるということである。そして何より特徴的なことは「犯罪以外なら何でもあり？」という言葉に象徴されるように、「やりたいと思ったら何でもできる」というところにある。実際、グループごとで企画案について話し合った時、「本当にこんな企画でいいのだろうか」「こんなことができるのか」といった、これまでの自分の経験からは予想もできない、そんな企画が各グループから提案された。それは自分の描く、塾という名の固いイメージとは大きくかけ離れた意外なものだった。しかし、この考え方こそが自分の「殻」の一つであり、従来の延長線でしか物事を見れなかった自分に後から気が付いた。

『殻を破るには？』

では、最初に破る「殻」とは何か。それは自分の「殻」がどういうものかを知ることではないだろうか。その「殻」は決して一つだけではなく複数存在し、しかもその一つひとつはまったく異なり、別の性格をもっている。まるで生き物のように昨日と今日とではその形を変えているかも知れない。こうした自分の「殻」を意識することが一つの目標となり、「殻」を破ることの第一歩となるのではないだろうか。まずは自分自身を冷静に見つめることが重要だと考える。

『これまで殻を破ったことはあるのか？』

これまで過ごしてきた三十余年間の人生の中で、何回、自分の「殻」を破ってきただろうか。「殻」を破るためには環境やライフスタイルの変化など、何か外的要因によってなされることが殆どで、みずから「殻」を意識し、破ることができる人はよっぽどの人物であり、逆にそんな人は珍しい人種かもしれない。少なくとも自分は前者であることには間違いない。

自分の中での大きな環境変化といえば、まずは誰もが思いつく、就職、結婚、そして一人の親になったこと。確かに環境も立場も変わり、それまでの自分とは違う意識、新しい自分になれた。しかし、一番大きな変化（刺激）と言えば労働組合の役員になれたことだと思う。

会社生活の中では自分の職場のことしか分からなかったし、他の職場を知ろうとも思わなかった。

また、気のあった仲間とだけ付き合っていても何の不都合もなかった。しかし、組合役員ともなれば会社全体を見なくてはならないし、気の合った仲間以外にも多くの人と接しなくてはならない、いわゆる「世話役活動」も必要になってくる。大勢の人の前で話す機会も多くなり、物事の判断も個人的見解だけでなく、客観的な判断も求められるなど、毎日が変化で勉強である。組合役員という外的要因によるものかもしれないが、自分にとっては「殻」を破り、人間的に成長するための貴重な機会を与えてもらったと感謝している。

そんな組合役員も7年目を迎え、今では全トヨタ労連本部役員という更に大きな活躍の舞台も与えてもらった。「自分に課せられた役割と責任とは何か」を常に問い、新しい「殻」に挑戦していかなくてはならない。

『もっとも重要で、なかなか破れない殻とは?』

労働組合の役員を務めていく上では、やはり家族の理解と協力が必要である。このことは組合役員に限って言えることではないが、自分の家庭でも家族が少なからず仕事の上での犠牲になっていると思う。少し前に「亭主元気で留守がいい」というのがコマーシャルで流行ったが、亭主（自分）が外で安心して仕事ができるのは、妻が家庭をしっかり守っていてくれているからであり、学校や幼稚園の行事に参加することができなくても文句を言わずに我慢してくれる子供たちがいるからである。以前、友人の結婚式で何度かスピーチを頼まれたことがあったが、その新婦に対し、「男が外で安心し

て働けるよう、しっかり家庭を守ってください」と言ったこともある。それほど自分にとって家庭（家族）の支えは重要だと認識しているつもりでいる。

しかし、いざ家庭に戻ると感謝するはずの家族に対し、逆に愚痴を言ったり、疲れているからと言って家事を手伝うこともほとんどなくなった。「遊んで！」とじゃれる子供にも「後で」と鬱陶しがることが多い。もう少し感謝の気持ちを素直に伝えることができたら、ちょっとした我慢や努力でどれだけ子供たちが喜んでくれるだろうかと時々思うことがある。しかし、この家庭の「殻」こそが、分かっていてもなかなか破れない極めて硬い「殻」であり、考えさせられる「殻」でもある。

『殻を破るとどうなるのか？』

「殻」を破る＝（イコール）人間的成長だと前段で整理した。ではその「殻」を破るとどうなるのかを考えてみた。破った「殻」は人生において経験として蓄積され、そのことによる自信が次へのステップとなる。いろんな経験や刺激によって新しい自分を見出し、仕事や生活に活かしていくことは重要なことではあるが、一つの「殻」を破ったからといって、決して安心することはできない。そこにはもっと大きく硬い「殻」が立ちはだかってくるからだ。まるでラッキョウのように「剥いても剥いても皮ばかり」ではないけど、「破っても破っても」そこには「殻」があるのだ。

常に新しい「殻」を破るという意識を持ち、そのことに果敢にチャレンジすることは重要ではあるが、もっと大事なのは、破った「殻」を再び被らないようにすることだ。人間とは怠ける動物だとよ

く言うが、「面倒くさい」といった心の甘え、ちょっとした気の緩みで再びもとの自分に戻ってしまう可能性をもっている。「殻」を破る努力と、せっかく苦労して破ったものを再生させないことが何よりも重要なのである。

『殻を破る時？』

では、人は自分の「殻」を破った瞬間というものに気が付くだろうか。これまで述べてきたように、「殻」を破ったり、人間的に成長できたということは後から振り返って判断できることであり、その瞬間など分かるものではない。ひょっとしたら自分で認識する自分の「殻」とは本当の「殻」ではないのかもしれない。知らず知らずのうちに多くの「殻」に直面し、多くの「殻」を破ってきているのではないか。言い換えれば人間は「殻」を意識しなくとも日々成長し、新しい自分を作りだしているのではないか。本人は気付いていないが、他人から見て「あいつ最近変わったな」と言われることが本当の「殻」を破ったことになるのかも知れない。

『殻の最後に？』

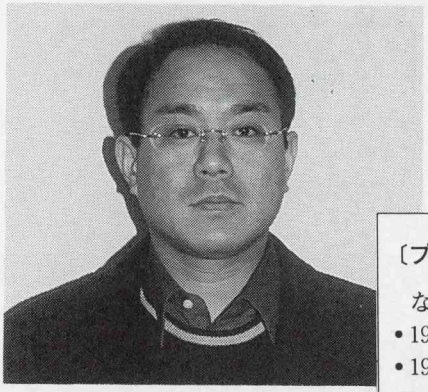
今回、産政塾への参加によって自分を振り返るという貴重な機会を与えてもらった。仕事に追われる日々の中で、自分や自分の生き方について考える余裕さえなかった。そういう意味でも今回、産政

塾に参加できて本当に良かったと思う。

産政塾の仲間たちと「殻」を破るという共通の目標を掲げ取り組んできたが、実際に自分の「殻」を破ることができたかどうかは分からない。しかし、自分の「殻」について考えることができたことで、少なくともなんらかの「殻」を破ることができたに違いない。今回の経験が今後の人生の中できっと活かされることだろう。

最後に塾生の方々、事務局の方、本当にありがとうございました。

「いろんな出会いを大切に」



アイシン労働組合
アイシン・エィ・ダブリュ支部
中　川　年　史

〔プロフィール〕

なかがわ　としふみ（35歳）

- 1967年９月　愛知県豊田市生まれ
- 1990年３月　國學院大学法学部政治学科卒業
  （東都大学リーグ　硬式野球部所属）
- 1990年４月　アイシン・エィ・ダブリュ㈱入社
  ７月　人事部人事課　採用係　配属
- 1997年１月　第２営業部　国内営業グループ
- 1998年９月　労働組合　専従執行委員
- 2002年９月　労働組合　ＡＷ支部　副執行委員長
  現在に至る

＜家　族＞　独身
＜趣　味＞　草野球、野球観戦、スポーツ観戦全般

＜はじめに＞

産政塾の関係者方々、特に安井さんには大変お世話になりました。あらためてお礼申し上げます。この産政塾に参加することにより、また新に「すばらしい仲間」たちと出会うことができました。ちょっと前のことでしたが、今振り返ってみても数々の懐かし思い出が目に浮かんできます。なんと言っても「他業種の仲間たち」と知り合えたことが一番の思い出になっており、この出会いをこれからも大切にしていきたいと思います。

さて、過去卒業された先輩方が残された冊子を拝見すると、冒頭に自分はギリギリにならないと原稿が出せない・納期が過ぎ担当者から催促されてやっと提出したなどのコメントが目に入り、自分は少しでも早く出そうと心の中で思っていた。ところが、フタを開けてみると実態は先輩たち（一部）と同じ道をたどってしまっていた。しかし、納期には何とか間に合わせないといけないという心情が脳裏を駆け巡り、あわてて筆をとることになった。

＜幼少の頃＞

家族構成は父・母・姉・兄・祖父・祖母・私の七人で、祖父母は地元（豊田市）で農家をやり、父は小学校の教員、母は農協に勤めいわゆる兼業農家の二男坊として生まれた。幼少の頃の私を簡単に表現すると「わんぱく坊主」とい言葉がふさわしいのではないでしょうか。小学校には朝早くから

行き、仲間と校庭でドッチボールやフットベースボールをほとんど毎日やっていた。学校から帰ると、家の近くのお寺や神社でビー玉やケンパン（メンコ）また、川や池・用水に行ってはザリガニやフナ・ハエ（川魚）をつかまえていた。夏になれば矢作川の堤防付近の林や山に行き、クワガタやカブト虫を採りにいっていた。（本当に自然と一体となって楽しんでいたことを懐かしく思う。）

だいたい、夜七時くらいになると友達のお母さんが、〝そろそろ家に帰るよ〟と言っては遊んでいる場所を聞きつけ、迎えに来てくれていた。今思うと、勉強したという記憶が自分の中には全くない。遊んでいる時が本当に楽しかった。しかし、今の子供たちを見ると、学校から帰るとこれから〝本当の勉強が始まる〟かのように当たり前のように塾に通っている。また、遊びはというとゲームボーイ・ファミコン・プレステといったたぐいの遊びに釘付けである。外で遊ぶといったことは殆どないように思える。勉強しなかった分、おかげで体は丈夫で健康に育つことができたし、沢山の仲間と出会うことが出来た。ちょっと前のことのように思えるが、今の子供たちは僕たちが育った環境とは大きく変わっていることが遊びのスタイルひとつとっても実感できる。塾に通う子供や親たちには、それぞれの夢や目標を持っており、決して否定することはできない。

＜中学・高校・大学の頃＞

小学校の頃は遊び過ぎ、その罰として勉強ができない（学校の成績が悪い）子供になってしまった。子供の頃のコンプレックスとして、ひとつあった。それは、自分より六歳上の姉と五歳上の兄が

いたが、二人とも不思議と学校での成績が良く常に学年でもトップクラスであった。今の時代の子供たちのように塾に通っていた訳でもなく、自然に勉強ができることをある意味うらやましく思っていた。そうした姉や兄を知っている、先生と出会い、よく中川〇〇の弟か？ということで自分も勉強ができるという風に見られるのが、いやであったし、すごくプレッシャーを感じていた。案の定、中学に入っても学業は芳しくなかった。また、中学からは嫌いな英語が科目として加わり、益々つらい日々を送っていたことを思い出す。しかし、これではマズイと思い、欠点を克服しようと自分なりに努力していた。まずしたことが、勉強するツール（参考書）をとにかく買い漁った。自分の手元に参考書があるだけで、心の安定剤となっていた。しかし、結果はやはりついてこない。しかし、進歩したことは勉強しようと今まで以上に時間を費やしたことであった。一方、勉強ができない反面、自分にはスポーツ神経がいいことだけが唯一の救いであった。体育の成績はいつも良かった。それを象徴するかのように小学校の卒業アルバムには〝目指せオリンピック〟とまで書かれていた。体がそれほど大きくないわりには、とに足が速く、スポーツ全般においても何でも自然とできた。勉強もこうであればありがたかった。自分の長所を生かし、中学高校時代はそれぞれ野球部に所属した。練習も真剣に打ち込んだ成果もあり、中学三年時には豊田市内で優勝することができた。毎日朝から晩まで練習でつらかったが、素晴らしい監督とチームメイトに恵まれ達成できたと思う。ある意味目標を達成できたことは、頑張れば結果がついてくるということを実感した。幼い頃、巨人の王や長嶋が大好きで始めた野球ではあるものの、優勝したことにより、今度はもうひとつ上の目標である〝甲子園に出場する〟というぼんやりとした幼い頃の目標が現実化してきたと、心ながら思った。

高校の進路を決定するにあたり、希望したのが当時、甲子園出場の常連校であった名古屋の私学四強を受験したいと担任の先生に相談した。ところが、近くに県立高校ができたため、先生の進めもあって名古屋へ行くのはあきらめ、地元の県立高校へ行くことを決めた。高校野球をやった以上、やはり甲子園出場を目指し頑張っていたが、現実は困難であることを実感した。二年の新人選戦では県大会出場の一歩手前でチャンスを落とし、三年間努力したが、結果はついてこなかった。甲子園に出れない以上、この先どうしたら、王や長嶋のようにプロ野球選手になれるのかといつしか真剣に考えていた。その結果、東京六大学リーグに入って活躍すれば、もしかしたらという安易な考えが浮かんだ。ある意味勉強が嫌いな自分にとってはつらい選択であった。その頃から勉強したんでは時遅し、とはわかってたものの、短い期間であったが憧れていた巨人の王が早稲田実業高校だったのですんなり、早稲田大学に入学して野球部に入り、神宮の杜で活躍したいという思いが日増しに強くなった。最終的にはどれか一つでも六大学に合格してくれればということでいくつか受験した。結果的には法政大学に合格し、一度は仮入部したものの、同野球部では幾多のプロ選手を輩出している。あの有名な江川卓もいた伝統ある野球部である。こころの中ではうれしかった。同世代で、PL学園桑田・清原が甲子園で優勝した時のキャプテンもすでに入部し、在籍していた。入部できるかと思い一度は門を叩いたものの、入部テストをさせられ、結果は残念ながら、入部できなかった。ほとんどが甲子園出場選手か、甲子園には出場できなかったが甲子園常連校の選手ばかりであった。いわば野球のエリート集団ばかりであり、簡単には入部できなかった。

しかし、東京の空の下で野球をすることをあきらめることができなかった。たまたま、もうひとつ、

高校時代の野球部監督の出身大学も合格しており、急遽監督を通じ、野球部に入部できるようにしていただいた。選手全員が野球部の寮に寝泊りし、四年間仲間と寝食を共にした。入部当時は東都リーグの二部に所属していた。東都リーグは一部～四部まである。東京六大学リーグは違って、成績が悪いと上下入替え戦があり、負けると下位へ降格する。別名〝戦国東都〟ともいわれている。一部リーグは神宮球場でプレーができ、プロが使用するグランドでもあり、魅力的である。入部した当時は残念ながら、二部スタートであった。いつも上を目指し、練習していた。厳しく、休日も少なかった。練習の甲斐あり、三年時には入部してから、春夏合わせ三回優勝したがやっとのことで、三度目の正直で入替え戦に勝つことができた。また一つ目標を達成できた。しかしながら、大学時代は一度もレギュラーをとることもできず、ベンチ入りしたものの公式戦には出場できなかった。選手層もあつくなり、マスコミから騒がれ、ドラフト会議で指名される要素を持ったチームメイトも身近にいた。ある意味自分ができるところまでは努力し、夢を果たすことはできなかったが、身近に騒がれるような選手と共に四年間一緒に野球ができたことで、自分の目標が達成できたと感じた。

＜会社との出会い＞

幸いにも、バブルの絶頂期の波と野球好きの採用担当者と巡り会い、何かの縁もあって会社にも入社できた。入社当時の自分は上司に怒られることが多く、会社の役に立つことができなかった。仕事ができる上司や先輩の下でまたまたプレッシャーを感じながら仕事をやっていたことを今でも思い

出す。上司や先輩がやっていた仕事を自分が中心となっていつしかやるようになった。それは採用業務であり、応募当時とは逆の立場となった。採用担当者は応募者から見ればある意味、会社のイメージ（シンボル）である。いくら会社の業績が良かろうが、建物が立派であろうが、最初に会うのは採用担当者である。その採用担当者の対応次第で欲しい人材も逃してしまう恐れもある。また、内定を出しても必ずや入社してもらえる確信もない。採用業務を通じ、うれしかったことがあった。沢山の方とお会いでき、また会社役員が応募者と面接している時に、なぜこの会社を選択したかという質問に対し、採用担当者が良かったからという答えがあったということを後で、上司から聞いた時には、応募者からのお世辞かもしれないがうれしかった。いくら省人化・自動化・ＩＴ化が進もうとやはりいつの時代でも最終的には「人」が管理しないといけない。「人をいかに育てるか」によって会社の将来が変わってくる。応募者が入社し、同じベクトル（目標）を向いた人たちとこれから仕事ができると思うとうれしさが増した。現在は組合活動に取組んでいますが、これからも人から信頼されるような人材になるよう一層努力していきたいと思う。

＜最　後　に＞

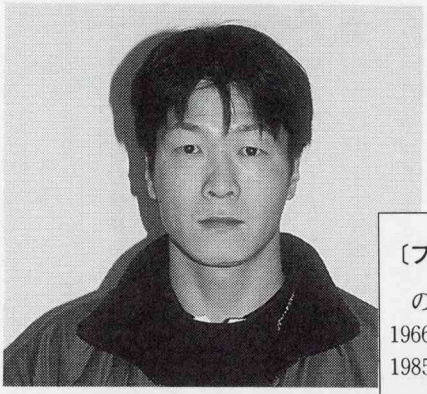
今、日本は非常に苦しい環境下にあり、元気がない。しかしこの逆境をむしろ挑戦できるチャンスだと思いたい。ある意味、変革が受け入れやすい状態にもある。上司・先輩たちが残してくれたレールに乗っかることは簡単だが、時代のスピードと共に、ニーズも多種多様となり、何が最善で最

良かを的確に捉え行動したいと思う。ある本を読んでいた時に、〝NATO（ナトー）〟といういう言葉を知りました。ヨーロッパでは良く耳にする言葉だそうですが、北大西洋条約機構のことをさす意味だけでなく、「ノー・アクション、トーキング・オンリー」

という意味だそうです。現在の日本人の精神構造を見ているとまさにこの言葉のようである。口では批判したり、非難するもののノーアクションで自分から行動は起こしません。自分の好きな言葉に「率先垂範」という言葉がありますが、自ら行動がとれるような人になることが目標でもある。きれいな景色や花を見れば感動するように、これからひとつでも感動できるような仕事ができれば幸せである。この産政塾を通じ、そういった感動を与えてくれる要素をもった仲間たちと出会え、貴重な体験できたことを大切にし、自分の財産として生かしていきたいと思います。

産政塾のみなさん、どうもありがとうございました。

四角い空間



トヨタ自動車株式会社
野坂利次

〔プロフィール〕

のざか　としつぐ（36歳）
1966年　滋賀県長浜市生まれ
1985年　トヨタ自動車（株）入社
　　人事部配属
2002年　現在に至る

＜家族＞　妻、長女11歳、長男９歳、次女３歳
＜趣味＞　ボクシング観戦、ロードワーク、野球、ゴルフ、映画鑑賞、読書、麻雀

1981年、3月9日（月）、中学2年生の私は到底学校などに行く気分では無かった。理由は前日に具志堅用高がWBA世界ライト・フライ級王座を失ったからだ。思えば具志堅の世界戦はいつも日曜日だった。小学生時代、6時半からのサザエさんを上の空で見て、さして興味の湧かない7時のアニメが終わると、いよいよTBSのスポーツ・テーマが流れてくる。そして具志堅が圧倒的な強さで中南米選手をKOする。翌日私たちはスッキリとした気分で学校に行く。そしてクラスの私と同じようなマニアの仲間で昨日の試合をグローブを付けて（当時、ボクシングチャンピオンセットというのがなわとびとグローブがセットで980円くらいで売られていた。）和気藹々と再現する。それがお決まりだったのだ。クラスの大半が昨夜のアニメ番組について楽しく話し合っている中でのこの談義は今から考えるとかなり大人びたものだった気がする。

46人の世界王者を輩出した日本のプロボクシング界の中でも、具志堅用高の実績が傑出していることは、論を待つまでもないだろう。世界王座13連続防衛、9戦目での世界奪取、4年半にわたっての王座君臨。そしてそのダイナミックなファイト・・・。まさに具志堅は日本ボクシング史を彩ったスーパースターだった。どの試合も彼は、こうなるといいなと思った理想通りの勝ち方をしてくれた。ゆえに少年だった私が本当に具志堅の永遠の王朝を信じたとしても、それは無理からぬことだったろう。私にとって、具志堅がリングに入場する時に流れるカンムリワシのテーマは勝利への序曲であり、早めに試合が終われば放映された今までの防衛戦のダイジェスト「カンムリワシ栄光の軌跡」は、いつも宴の後の華やかな後夜祭だったのである。

そんな具志堅が最終回の12R、TVのブラウン管側から見て赤コーナから左へ2mくらいの所でペ

ドロ・フローレスに滅多打ちに合い、KOされてしまったのだ。この光景は21年たった今でも鮮明に覚えている。そして、偶像崇拝していた具志堅が負けたことによって初めて彼より強い男たちの存在を知り、逆に今まで以上にボクシング観戦にのめり込んでしまい、今では各地へ赴き年間、100～120試合くらいを生観戦している。

眩しいばかりのライトに照らし出され、無数の視線を集め、大歓声に包まれるリング。そこはまさにファイターたちの晴れ舞台である。しかし。そこから扉一枚を隔てたバックステージはきらびやかな表舞台とはまったくの別世界だ。本番を前にした選手やセコンドたちの不安と緊張。戦いを終えた男たちの安堵と歓喜、そしてそれと同じ数だけの後悔と無念。そんな剥き身の感情がそこかしこに渦巻いている。また、ボクシングではいわゆる『飯が喰えない』。実際にボクシングだけで生計を立てているボクサーは、この日本にはほとんどいない。日本チャンピオンでさえ必ずといっていいほど別に仕事をもっている。

プロボクサーの1試合に対するファイトマネーは基本的に決まっている。4回戦で6万円、6回戦や8回戦で10万前後、10回戦で15～20万前後、日本タイトルマッチは王者が100万円前後、挑戦者が20～30万円前後、そして世界チャンピオンになってはじめて、ボクシングで飯が喰えるようになるわけである。それでも年収ベースにして3000万円くらいで選手生命の短いスポーツにしては少ない。野球なら、2年目の選手でももらえる額だ。だから、長者番付に名前の出るボクサーはほとんどいない。理由は簡単で、野球であれば年間145試合出来るがボクシングはせいぜい年間3～4試合しか出来ない。ボクサーには給料なんてものは無いのでその試合のファイトマネーだけでは到底生活が出来な

いのである。一度でも世界チャンピオンになって引退後、ジム経営や解説の仕事でも出来ればいいがそんな幸せな人はごくわずかである。

またボクサーにつきものなのが、『減量』だ。体内の水分を搾れるだけ搾り出す減量は、脂肪を燃焼させることを目的としているダイエットとは根本的に違う。元々ボクサーに脂肪などほとんど付いていないのだから、ダイエットは不可能に近い。

ボクシングは体重別に、最も重いヘビー級（86・18kg以上）から、最も軽いミニマム級（47・61kg以下）まで全部で17の階級がある。

なぜこのように階級を細かく数キロずつに分けて試合を行なうのか。答えは簡単、互いのパンチ力をできるだけ同一にするためである。体重が違えば、パンチ力は異なる。体重を考慮せずやみくもに試合を組んでいたら、体の大きい人がいつも優位に立つことになり、それでは戦いとしてフェアではないし、見ている側も面白くない。ではなぜボクサーはナチュラルな体重で試合をせず減量を行なうのだろうか。なぜ無理やり10kg近くも体重を落として試合に臨む選手がいるのだろうか。この答えは人それぞれで、一概に言うことは出来ない。「体重を落とせるだけ落とせば、体がシャープに動けるようになる。」という人もいれば、畑山隆則のように、「ライト級にあげるといきなり選手層が厚くなるから、できるだけスーパーフェザーでやりたい。」という選手もいる。また、辰吉丈一郎のように、「バンタム級はボクシングが生まれた当初からある、伝統の階級だから。」と、歴史を背景にあげる選手もいる。昔の選手でいうとガッツ石松なんかはライト級王者時代、毎回試合に臨むたびに15kg落としていたというのだから驚異的だ。またいったんその階級のチャンピオンともなれば、減量がきつ

かろうがなんだろうが、そこで戦い続けなければならない。試合まで期間が短く、それでも落とさねばならないリミットにはまだ達していないときどうするか。ガムを噛むのである。唾液は汗の何倍も出やすい。元ＷＢＡ世界スーパーフライ級王者のセレス小林は、減量がどうしてもうまくいかない時はガムを噛み、出た唾液をビニル袋にためながら、ひたすら長距離のロードワークを行なっていたと聞いた。ここまでやれば10kgなら落とせる。さて、通常体重から15kg減量するとなると一体どうするのか。もはや一般人はおろか、普通のプロボクサーでも想像できない世界に入る。先ほど、10kgの減量では、ガムを噛みながら唾液を捨てて体重を落とすということを述べたが、実はそれにも限界はある。皮膚などから体中の水分を出し切ってしまうと、もはや唾液も出なくなり、ガムを噛んでもクチにへばりついて取れなくなるのだ。さて、サウナに入っても皮膚から汗が出ない。ガムを噛んでもクチから唾液は出ない。それでもあと数百グラムでも落とさなければならないとなったとき、ボクサーはどうやって体重を落とすのか。最も簡単に体重は落ちるが、非常に危険な方法。「血を抜く」のである。400㎖抜けばぴったり400g落ちる。水分を出し尽くした後はもうこれしかない。元ＷＢＡ世界スーパーフライ級王者の飯田覚士などは、どうしても最後の数百グラムが落ちなかった時、血を抜いたという。めちゃくちゃ身体に脂肪を蓄えた人なら、少しの食事制限と少しの運動だけで簡単に体重を落とすことは可能だろう。だが、筋肉の鎧で身をまとい、体脂肪率5～9％のボクサーにとっては減量は過酷以外の何モノでもない。

また次に恐ろしいのが『ボクサー症候群（Punch Drunksyn-Drome）』、いわゆるパンチドランカーだ。段階的に最初は平均感覚を失ったり、歩行が不安定となり、それから記憶障害を起こし、最終的

には痴呆状態になるのである。ボクサーは常にこの病気と隣り合わせなのだ。

その他にも目の病気である『網膜剥離』。その言葉はボクサーにとって死刑宣告に等しいものだ。日本ボクシング協会のルール上、引退勧告の対象となるからである。リングに上がれない、当然ボクサーの廃業を意味する。それはボクサーにとって天敵とも言える難病だ。眼球を覆う網膜が剥がれ、硝子体の方向へ浮き出す症状を指す。稀に近眼が高じて発症するケースもあるが、多くの場合は頭部・顔面への強い衝撃が引き起こす疾病とされている。

かなりどぎつい事を述べてきたが、なぜ日常生活において我々が決して経験することのない、金にならず、しかも厳しく過酷な減量や練習、時には命を落とす危険までを顧みず、いわゆる割に合わない職業として「ボクサー」を選ぶ人がいるのか。それは彼らが「勝利」という栄光を掴むため、日々、己と戦っているからだ。決して苦労に見返りを求めず、ただただ純粋にチャンピオンという自分自身の未踏峰を目指し続けるからこそ行える行為なのだ。翻って自分はどうか。現在の仕事を心の底から生業と信じサラリー以外に求め、目指すものがあるのか。残念ながら入社して17年経った今でもビジネスウェイすら決まらず、苦闘と挫折と迷いの日々である。だから私はリングに上がり続けるプロボクサーを尊敬せずにはいられない。食事を抜き、水分を絶ち、ぼろぼろの身体でも夢を追いかける。つらいとかきついとか弱音を吐く前にまずはそれを乗り越えるために実践、行動している。

この塾誌の執筆を自分自身を見つめ直す良い機会とし、今一度自分の働く職場、四角い空間に夢を見つけたい。

自らチケットを買い求め試合会場へと足を運ぶ私は、ただ漠然と選手たちが戦う姿を見ている訳で

はない。そこに多かれ少なかれ、日々、何かと戦っている己の姿を投影するからこそ思いを込める。剥き出しの男たちが、己が何かを証明せんがために繰り広げる崇高な戦いに自らを奮い立たせる。リングという聖域に立つことを許されるのは選び抜かれたたったふたりの人間だが、その両者に託された幾多の人々の願いや思いもまた確かにリングに存在するのだ。だからこそ、あの四角い空間は気高く、眩しく、神々しい・・・。

『四角い空間』を読んで

私の現役中をふり返ってみても、『チャンピオンになる』という確固たる目標がありながら、今の野坂さんと同じく苦闘と挫折と迷いの日々でした。

たまたまボクサーという短い人生では、諦めずに戦い続けることで頂点まで登りつめることが出来ましたが、引退後の第二の人生でまた新たな戦いが始まっています。

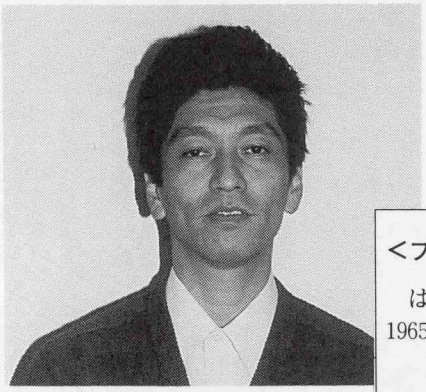
私は野坂さんがボクサーのように自分を見つめて戦い続ける限り、その先に大きな成功があると信じています。自分と戦えない者には何の結果も出せないと思っています。

野坂さんのバイタリティーに負けないように、これからも戦い続けようと思います。

元ＷＢＡ世界スーパー・フライ級チャンピオン

飯　田　覚　士

『とりあえず、やってみることだ！』



豊田工機労働組合
服　部　淳　二

＜プロフィール＞

はっとり　じゅんじ（37歳）
1965年　大阪府大阪市生まれ
（ほとんど生まれただけ）
名古屋、富山、春日井育ち　現在大府市在住
1988年　豊田工機株式会社入社
2001年　労働組合専従
現在に至る
＜家族＞　妻、長男
＜趣味＞　ドライブ、アウトドア

産政塾のテーマは『殻の外へ踏み出そう』ということだったが、そういう観点で自分の人生を振り返ってみることにした。生まれて今年で三十七年になったわけだが、思い返してみると今までいろんな事においてどちらかと言うと一つの事を長く続ける方だった。〝何かを続ける〟と言う事はとても難しく、立派な事のように思われがちだが、自分なりに考えてみると、それは何事においても『事なかれ主義』的に生きてきたのではないか？という風にも感じられる。そんな、人生の中で出会ったものをいくつかあげてみる。

『サッカー』

やはり、私の場合、人生で出会ったものといえばサッカーは外せないだろう。（とは言うものの、全国大会に出場したことがあるとか言うものではないが・・・）

私とサッカーの出会いは小学校四年生にさかのぼる。当時、小学校では男子はサッカー、女子はポートボールが課外クラブで行われており、いわゆるスポーツマン的な存在の子はほとんどがこれに属していた。このクラブのスタートが小学四年生なのだが、例年どおり入部時には希望者が殺到した。予定人数よりもオーバーしたために何人かが他にまわされることになった。方法はじゃんけんだったと思う。残念ながらはずれた私は仕方なく気象部へ。今思うと、〝ソフトボール〟でもなく〝陸上部〟でもなく、なんで気象部なんだ？と思うが、多分、体育系のクラブは既に人数オーバーでわけもわからず入ってしまったのだろう。しかし、その後、「あとからサッカー部を希望した生徒が入る事

ができた」というわさがながれた。家へ帰ったあとも悔しくて悔しくて夜遅くまで泣いていたそうだ。後日、この話が担任にも知れ、私は半泣き状態でその話をしたところ、再度希望者が集められる事になり、めでたくサッカー部への入部が認められることとなった。これが私とサッカーの十三年間（実際にはそのあともあるが・・・）に及ぶ〝つきあい〟の始まりである。当時はサッカーを課外クラブでやってはいるもののやはり野球の方が盛んだった。まして我がチームは一年間で公式戦では一点も取れないという弱小チームだった。そんな中でも私はやっぱりサッカーが好きだったのだろう。卒業アルバムの「将来、何になりたいか？」というコーナーにクラスのたくさんの友人が『プロ野球選手』と書いている中でただ一人『サッカーの日本代表』と書いていた。子どもながらに〝俺はみんなとちがうんだぞ〟という事をアピールしていた事を覚えている。

その後、進学するたびに「もうやめよう！」と何度も思い、中学では〝テニスをやろうか？〟高校では〝バスケット（だったかな？）にしようか？〟大学では「もう体育会はやめた！」なんて言いながら、結局、五月にはいつもボールを蹴りはじめていた。いつも『やっぱりやめられなかった』といいながらもそれは新たな事を始める不安感と一からのスタートになる〝面倒〟がいやだったことがそうさせてしまったのだろう。こうやって振り返ってみると、新しい事をやってみる機会は何度もあったが、自分からやめてしまったわけだ。

『仕　事』

大学を卒業するとともに次に出会うのはやはり会社、そして仕事である。私が就職した頃は今ほどではなかったがかなりの就職難で、希望どおりのところにはなかなかいけなかった。私も実は今の会社（豊田工機）は最初から希望していた会社ではなかった。第一希望の会社は学内の選考で辞退させられ次を探していた時に教授にすすめられてたまたま受けた会社だった。豊田工機は名前からわかるように工作機械を作っている会社だが売上の半分以上は自動車部品でまかなっている会社だ。私の入社時の希望も実は工作機械ではなく自動車部品関連の仕事につきたいと言うものだった。しかし、配属先は工作機械（専用機）の設計。製造業関連の人ではない一般の人（特に女性など）に仕事の内容の説明をする時にいつも「自動車の部品を作る機械を作っている会社で設計をしている」と言うのだがなかなかイメージを描いてもらえない仕事である。本当に〝えんの下の力持ち〟である。しかし、長年この仕事をやっていると少しずつ「誇り」のようなものが出てくるもので、開塾式の時の自己紹介でも少し話したように、「私が考えた機械のおかげであなた方の会社が成り立っているんですよ」なんて事を思うようになる。「お客様に対する姿勢がなっとらん！」と言われそうだが・・・。一方では会社の業績に貢献している自動車部品事業へ異動させてほしいということはよく思ったことがある。しかし、異動どころか社外への出向もなくひたすら専用機をみてきた。

結局、こうして入社以来十四年間ずっとこの専用機設計をやって、ここでも一つの事を長い間続けることになった。

こんな感じで人生の中で出会ってきたものについて少し思い返してみるとどれも最初の出会いの部分ばかりが思い出され、その後の長い付き合いについてはなかなか書きにくいものである事に気が付く。それだけ、出会いが印象として残るのは仕方ないと思うが、そこにはかならず多かれ少なかれ〝ゴタゴタ（面倒な事）〟が付いてきたからだと思う。年をとるとともにこのことは潜在意識としてついてきて新しい事を始める時の大きな抵抗になっている。その結果が〝面倒だからこのままでいいや！〟につながっているのだと思う。

この抵抗を乗り越えて何かを始めるにはやはり何か〝キッカケ〟が必要である。その点では産政塾は多少なりともそれなりに貢献してくれたと思う。

『労働組合』

いままでずっと『面倒だからこのままでいいや』で過ごしてきた私にとって、これはたいへん大きな出来事だった。代議員になって一年が過ぎようとしていたある日、周りのうわさから〝来期の専従執行委員の話がある〟ということを耳にした。はじめにも話したように『事なかれ主義』的に過ごしてきた私にとっては『労働組合』（＝みんなの世話役）はとても面倒なイメージが強く、まして専従執行委員なんてことになれば一日中この面倒な事を仕事にするわけである。こんなにつまらないことはない。私の第一声は〝絶対にいやだ〟だった。また、一応〝技術屋〟としてやってきた（これからもやっていく）私にとって数年間職場を離れて全く畑違いの事をすると言う事はたいへん不安な事で

あった。多分これは今回の参加者の中にもたくさんいる専従執行委員の人は同じだろうが、職場復帰した時についていけるだろうか？今、技術屋として一番働かなければいけないときに職場を離れていいものだろうか？もどった時にいわゆる〝浦島太郎状態〟になる事は避けられないだろう。そんな気持ちでどう返事をしようかとしばらく悩んだ。いってみればこれも大きな殻の外へ踏み出す出来事なわけだ。やはりそこには意識の中での大きな抵抗があったわけである。「専従執行委員をやることは技術者としてマイナスにならないか？」と先輩、ＯＢに聞くと、「確かにそうかもしれないが、それ以上に得るものは大きい」と誰もがいう。本当にそうだろうか？このことは専従になって一年経った今でもよくわからない気持ちで日々を過ごしている。それでも一応、今までの殻の外へ一歩踏み出したのかもしれない。長い人生の中でこの労働組合で過ごす数年が必ずプラスになると信じて引き受ける事にしたがこれは十年後、二十年後に判断する事にしよう。

『産　政　塾』

産政塾に入塾する時に案内をみて考えた事を思い返してみる。〝殻の外へ踏み出す？〟毎回、何かとんでもない事ばかりをやらされるのかという不安はあった。しかし、これ（産政塾）がなければまずやってみることもなかったものに出会う〝キッカケ〟は確かに提供してもらった。

●ボクシングジム体験

第一回目がこれ！「おいおい、かんべんしてくれよ」ってな感じで当日は参加したが、なかなかい

い汗をかかせてもらった。個人的には興味はあったがバンテージまでまいてトレーニングをするなんてことは自分からやろうとするわけがない。某TV番組で「ファイトクラブ」なんてものが話題になっていた時だけに子供との会話のネタにはたいへんいい経験をした。

●関谷醸造見学

アルコールが全く苦手な私にとっては、これまた自分からすすんで行くわけがないところであった。みなさんはたいへんご満悦のようだったが、とりあえずこんなところなんだと言う程度でも良かったかな？

●イオンのCSを学ぶ

わがグループの企画。その後、買い物はどちらかというとイオンが多いですね。そう言えば〝言い出しっぺ〟は私でしたね。田中リーダー、段取りをまかせっきりで申し訳ありませんでした。

●陶芸体験

何度かやってみようかなと思ったことがあったが、いつも得意の「時間とお金がかかって面倒だからやめておこう」ってな感じでやったことがなかった。でも時間もお金もかからないし仕事の一つだと思ってやるとこんなに楽しい仕事はない。

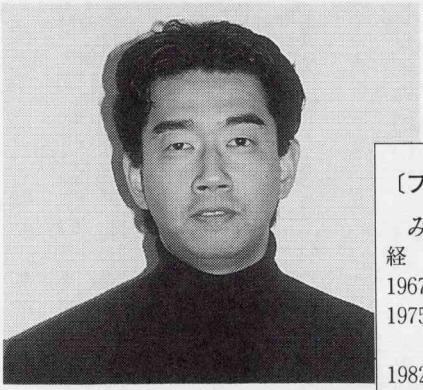
●蓼科山登山

これだけはキッカケ作りをしてもらわなくても出会ったかもしれない事で一番参加したかった企画だった。でもその後、この不参加をキッカケに蓼科山よりも高い御岳（かなりの自己満足）へ登ってきた。これまたひとつのキッカケ作りに大きく貢献。

半年間こうしていろんな企画に参加して、そしていっしょにやってきた仲間といろんな話をして感じた事はごちゃごちゃ考えずに『とにかく、やってみる』ことの大事さだ。やろうと思ってもやめてしまう事が何かのキッカケからやって見ると実は思いかけず楽しい事であったり、自分に向いていると感じたりする事がある。この事は〝子供との接し方〟でもたいへん勉強になった気がする。産政塾がはじまって以来、私は息子に対していろんな場面で「いいから、やってみろ！」と何回言っただろう。口癖のように言いながら自分の意識も高めようとしていたのだろう。何か新しい事をやろうとするときに必ずといっていいほどついてくる意識の中でのさまざまな面倒な事はとりあえず置いといてまずやりはじめることだ。面倒な事はその後で片付ければいい！そんな気持ちでいいんじゃないだろうか。それは、時には本当に面倒な事であるかもしれないが今までの生き方、物事の考え方の殻をやぶる為にはまずこれからだ。それが家族や他人に多少迷惑がかかることでもいいじゃないか。少しでもやってみようと思ったことはとにかくやってみよう。この事（〝脱、事なかれ主義〟）を日々意識して過ごすようなキッカケをくれたのが今回の産政塾だった。『殻の外へ踏み出す』というレベルにはまだまだ達していないかもしれないが、少なくとも『今までの自分から変わる』為の一歩を踏み出したのではないかと思っている。

最後に、いっしょに参加された塾生の皆さん、事務局の安井さん、限られた期間ではありましたが貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。また、別の機会にお会いできる事を楽しみにしています。

大マジに反省しました。
良かったです、産政塾。



アスモ労働組合
水　野　雅　通

〔プロフィール〕

みずの　まさゆき（35歳）

経　歴

1967年　静岡県静岡市で誕生。

1975年　小学校３年春、浜名郡雄踏町へ父の転勤のため、転校。

1982年　中学校３年秋、静岡市へ父の転勤のため、転校。

1983年　結局、静岡工業高等学校　電気科へ

1986年　春、アスモへ入社(湖西市)　㈱デンソーの当時学園に一年勉強に、刈谷へ

1987年　春、再びアスモへ戻り、ワイパモータの保全部署へ配属

1993年　春、技能教育センターへ指導員として移動

2000年　秋、労働組合の専従になり、現在に至る。ふう…。

趣　味

表：音楽鑑賞（ジャズ、クラシック等）、テニス、サッカー、

裏：イベントプロデュース、司会各種、おしゃべり

得意技

すぐに皆とお友達になってしまうこと。

十三期生の皆さんはどんな内容のことを塾誌に載せられたことでしょう。前期までの塾誌を拝見させていただくと、比較的「殻」について塾生の方々がそれぞれ感じられた内容が多いですね。

私も素直に「殻」をキーワードに産政塾を振り返ってみたいと思います。

[「殻」に興味深々]

産政塾のような他組織や異業種の人達と出会う場、交流するような場は、二十代の頃から、組合活動を通じて幾度か体験してきたことで、私にとっては「慣れていたこと」でした。そして基本的に「人」が好きな私は、こうした研修の中で、何よりも（研修の中身よりも）「出会い」や「人とのつながり」に重きを置いてきました。

しかし、最近ではこうした経験はもう「充分」という充足感が強く、若い世代に体験してもらいたいと思っていましたから、自らが手を上げることは久しく無かったです。そんな私が何故「慣れている」と思われる研修、産政塾に参加しようと思ったのか。それは最初のパンフレットにあった「殻の外に飛び出そう」という言葉でした。やけに新鮮さを感じました。最近、自分自身のあり方に少し不満があった私は、「人との出会い」以上に、この言葉に惹かれ、手を上げたのです。

そして第一回目の開塾式の日、私は自己紹介の中で、「産政塾を通じて自分の殻の形がどんな形をしているのかを見てみたい！」と、皆の前で偉そうに言い放ちました。

「殻」と言っても、人によってその捉え方は様々でしょうし、これが正しいと決めつけるようなも

のではありませんよね。あえて私にとっての「殻」を言わせてもらうなら、それは今まで自分が自分自身に作ってきた「心のバリア」であり、物事に対する線の引き方や、長い間に出来た、「これはこういうものだ」という価値観そのもののことです。私はこの塾へ参加した時、自分という人間を大抵は理解しているつもりでしたが、できてしまった自分の「殻」がどんな形をしているのか、この産政塾を通じ、改めて客観的に確認してみたいと思いました。「ああ、俺はやっぱりこういう人間なんだ」と、実感してみたかったのです。

［自分の殻はどんな形？］

「なんでもあり」の精神が産政塾。とはいうものの、結局常日頃の生活から抜け出し、「普段体験できないようなこと、聞けないような話しを体験する」という大きな流れは自分達でつくってしまったような気がします。実際にボクシングジムでスパーリング（私は当時スパークリングと一言いったばっかりに、皆から散々いじめられた）を体験させてもらい、死ぬような筋肉痛に襲われたこと、あまり好きでもないお酒の製造工場へ出かけ、お酒作りに賭けている「杜氏」の方のお話しを聞き感銘したこと、六十歳という高齢にも関わらず北極点を制覇した、ペンションオーナーの伊藤さんによる人間味あふれる、かつ壮絶な体験談を聞くなど、そうした自分の心身では到底到達することの出来ない世界で闘っている人、または一つのことに集中し地道に精進を積み重ねている人達の姿は、私の心に「感動」という形で刻まれました。本当にすごいなと思いましたね。

でも、私にとってこうした体験は、「カチッと固まりつつあったハートにビブラートがかかった」点では良かったのですが、それで自分への不満が解消されたわけでもなく、一方では何か物足りなさを感じていました。そんな自分の気持ちがきっと途中から現れていたのでしょう、グループのリーダーとして中々企画をまとめることが出来ず、皆には大変迷惑をかけたと反省しています。（ごめんね、まささん、ヒデ、恭ちゃん）。私は今の自分に不満を覚え、それを変えるために殻の姿を実感したかったわけで、もっとハートのぶつかり合いと言いますか、自分の考えを偉そうに語って、「水野、おまえはバカだ戯けだ」と言われたかったのです。本音で語り合う、意見をぶつけ合う議論の場が欲しいのに。そうしなければ自分自身の「殻の形」が見えてこないよ！と心の中で叫んでいました。

ところが、私のとっていた行動はと言えば、そんな気持ちとは裏腹に、「まぁ、いいか」と腰を下ろし、毎回ただ面白半分に研修に参加しているだけだったような気がします。そうした議論の場をつくってほしいと事務局の安井ちゃんに対して頭で思っているだけで、実際に会えば、おちゃらけて、真剣に話そうともしなかった。産政塾は「なんでもあり」。誰も「やってはいけない」なんて言っていない。結局自分が「言い出さなかった、行動を起こそうとしなかった」だけ。自分を変えようと望んだはずの産政塾が、いつの間にか自分自身で、「やろう」から「やらなければならない」、要するに「やらされ感」を心のベースにして、「慣れ」の中で適当に行動していました。これこそが僕の固い殻だったのです！

最近の自分の行動を振り返れば、「もっと、こうするべきだ」「こうあるべきだ」「なんでこうしないんだ」とあるべき論を振りかざし、強い意思をもっている割には相手にそのアクションを期待して、

待っているだけの自分がいる。さらには動かない、結果として出てこない相手に不満を抱いて、文句ばかり言っている。そういう自分は何をやったの？と考えれば何も動いていない。これはどういうことなのでしょうか。

会社に入って十六年、無事に嫁さんをもらい、子供達もなんとか育っているらしい？三年前には我が城も構え、おかげさまで両親も健在です。仕事面では経験値も高くなったのか、周りのいろんな状況をある程度は判断・理解できるようになり、先ほどのように「あるべきだ！」などと、偉そうに自分自身の考えが口に出るようになりました。さらには人脈面においても、保全一人事一組合と比較的多くの人達と接する仕事に就いてきた私は、我が物顔のように社内を歩いている。

結局、このように特別な苦労や努力もせずここまできた、順風満帆とも言える人生への満足感が、逆に受け入れない、外に出ようとしない「固い殻」を形成させてきたのではないだろうかと思っています。

今回の産政塾という鏡に映しだされた自分の姿を真正面から振り返ってみれば、それは人生そのものの「慣れ」の中にどっぷりと漬かり、「居心地の良い」状態の中で、さらに「あぐらをかいていた」姿でした。根底の心の中であぐらをかいて、いつの間にか「産政塾が何かをしてくれるもの」だと待っていた自分。高いところから皆を見渡し、謙虚さや素直さが欠けていた自分。仕事の傍らだからと入りきろうとせず、一歩外から見渡している傍観者のように参加していた自分に、改めて気づかされた思いであり、今私は、自分自身で作り上げてきた心のバリア、「殻の形」が、「人生の慣れの中であぐらをかき、甘え、おごっている姿」であること、これこそが今の「自分の殻」なのだと、強く

実感しています。

［自分改革へ向けて］

皮肉だなぁと思います。産政塾の期間はこんな心境にはなれなかったのに、この塾誌に向かっている今、ヒシヒシと殻の形が見えてくる。えらい長く延滞してしまった塾誌に本当に感謝です。しかし殻の形が見えたからと言ってここで私の産政塾を修了するわけにはいきませんから。大切なことは、ここから自分が「どうするのか」であり、それを考えなければ、元の木阿弥です。かといって大上段に構えて、できないことを口にしても意味が無い。自分改革などとかっこいいことを掲げたものの、そのプロセスは、ひよこが自分の殻を破って新しい世界へ飛び出していく「様」のように、まずは殻の一つの点を自分自身で割ろう割ろうと、光がさすまで突付いて穴をあける作業しかないでしょう。私にとっての穴を開ける行為、それは当たり前のことですが、まずはこれから見るもの、聞くものすべてに対して、最初から自分の価値観でこういうものだろうと線をひいたり、決めつけず、できるかぎり心を開いて「素直に受け入れる」ように心がけていく事しかないと思っています。そうした心があれば、次に必ず自らの行動に表れるはずです。

結果的に最初に述べたように、「自分の殻の形は大抵のことは分かっているつもり」だった私が、この産政塾～塾誌づくりを通じて、「ああ、俺はやっぱりこういう人間なんだ」と、自分の殻の形を客観的に気づくことができたこと、さらにそこから自分改革への糸口を見つけ、当たり前のことかも

しれないけど、歩き出す方向を得られたことは、大変大きな収穫だと思っています。参加してよかったです。

[つながりを大事にして、これからが本番]

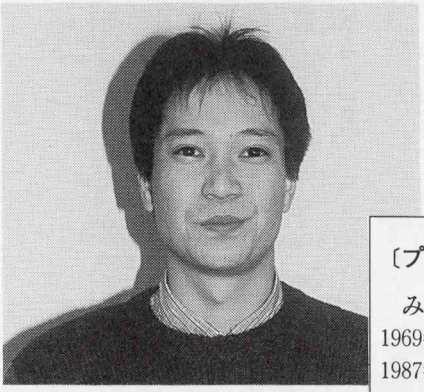
実は先月と今月で、トヨタ自動車㈱の野坂さんとトヨタ労組の井上まささんのところに行って来ました。まささんとは同じグループでしたが、実際には中々ご一緒できなかったことから、正直言って産政塾終了後、二ヶ月も経ってから連絡するには少し抵抗がありました。でも、実際に電話をしたら、「おー、みずっちー！元気―」と、嬉しい返事が・・・。

野坂さんも「なんや、おまえらしくないやないか」、「いつくるんや」と相変わらずの様子。こうした気兼ねない会話が心を温かくしてくれます。さらに私がむちゃくちゃ嬉しかったのは、お二人とも超多忙な中を予想以上に時間を割いて、「ここまでやってくれるんですか！」と思えるほど、本当に熱心に応えていただいたことでした。産政塾だからこそだと思いますよ、ほんとに。

改めて「人とのつながりや、気持ちを大切にする」ということが、自分にとって、どれほど大事なことか、決して「充分」なんて感じるものではないことも再認識させてもらいました。十三回期生の皆とは、出会ってわずか半年、それも月一ペースの会合では、真の仲間になれたとは言えないですからね。これから「自分改革」を実践していくことで、皆さんと本音で話せる関係になっていけたらと思います。

私にとっては今からが本当の産政塾の始まりであり、完結させるのは誰でもない「自分」です。今回の反省を節目にさらに自分づくりに燃えたいと思います！ありがとうございました。

転 轍 機（ポイント）



株式会社デンソー
技研センター
宮 城 英 樹

〔プロフィール〕

みやぎ　ひでき（33歳）
1969年３月　山口県豊浦郡生まれ
1987年４月　日本電装㈱入社（現在㈱デンソー）
2001年４月　㈱デンソー技研センター出向
現在に至る

＜家　族＞　独身
＜趣　味＞　バレーボール

はじめに

１９８７年４月。私は日本電装株式会社（現㈱デンソー）への入社と同時に日本電装工業技術短期大学校（現デンソー工業技術短期大学校）に入学した。翌１９８８年３月に同校を卒業後、工機部へ配属となり、私はサラリーマンの典型とも言える、描かれたレールの上を歩んで行くことに何の戸惑いもなかった。配属から３年後の１９９１年３月。私は再びデンソー工業技術短期大学校に戻ってくることとなった。今度は受講者としてではなく、指導者としてである。

ここには中卒者を３ヵ年教育している「工業高校課程」と高卒者１ヵ年教育の「高等専門課程」、高卒者２ヵ年教育の「短大課程」があり、私は工業高校課程で学科や実技、クラブ活動、生徒会活動などを担当することになった。最初の頃は何度も挫折し、私は教育という仕事が不向きだと思っていたが、今では「好き」と言う感覚に変わっている。

２００２年１月。私は「産政塾」に参加した。産政塾のテーマである「殻の外へ踏み出そう」の言葉に、私はいつしか忘れ去っていたものを取り戻しに行かなくてはならないような衝動に掻き立てられた。忘れ去ったものを見つけ出すためにも、この産政塾生であった半年間を振り返り、整理することで塾誌の１ページとすることにする。

謙虚な心

1月24日。私は第1回産政塾の会場である豊田市の全労済豊田会館に足を踏み入れた。この産政塾がどういった趣旨で何をするのか全く分からなかったが、開塾式の中で塾長が言われた「自分の殻はその殻の外に出ないと本当の殻は見えないのだ」と言う言葉が深く心に残った。その後、塾生の自己紹介があり、なんと労働組合の方が約半分、人事関係の方が約半分と、私はとんでもないところに来てしまったと正直思った。

私は塾生の方々とお付き合いさせていただく中で「労働組合の方はすごい」と感じた。まずは意思決定と行動の早さに驚かされた。企画についての話し合いで、周囲の方に配慮しながらも自ら考えを持ち方向性を打ち出している。更に企画が決定すれば即行動される。時間にムダが全くない。各企画でお世話になった講師の方への質問時間では、一瞬でも空気が止まるとすかさず挙手。問題発見や情報収集能力にも長けている。発言されれば論理的な表現力を披露され、私にはとても真似のできない素晴らしい方々と出会った。企画後の懇親会でも周囲に気を配られ、率先して行動される。日頃から組合員を第一に考えて行動されていることが、見ているだけで伝わってきた。まさに「自分が楽しむよりも他人が楽しんでくれたほうが楽しい」と言わんばかりの「本物の謙虚さ」に出会った気がした。

素直な心

3月20日。私は生まれてはじめてボクシングを体験した。日頃からクラブ活動を生徒と一緒に行っている私にとって、体力的な不安はなかった。ところが実際に体験すると3分どころか1分を過ぎた

頃から私のカラータイマーは鳴り始めた。30秒休憩、3分実施のインターバルが何度も私を襲った。全部で何ラウンドやったのだろう。記憶は全くなかったが、ただがむしゃらにボクシングをやっている自分がいた。まるで子供のころのように無我夢中だった。子供のころはいつでも夢があったし、何をやっても自分は成功すると思っていた。だから、どんなことにもチャレンジできた。しかし、今の自分にあの頃のような心があるだろうか。時間に負われ、仕事に負われと言い訳をしている自分しか思い出せない。何にでも純粋に考えていた子供のころのような心でありたいと素直に感じた。

実はこの文集の題目に使っている「謙虚な心、素直な心、反省の心、感謝の心、思いやりの心」は緑ボクシングジムに掲げられていた言葉である。

反省の心

7月25日。私たちのグループ企画である蓼科山の登山を行った。行き交う方々が老若男女とわず、皆さん明るく挨拶をされる。登山のマナーであったにせよ、とても清々しい気持ちになった。当然私も大きな声で元気よく挨拶をする。ここでも素直な心を経験することができた。

それとは裏腹に私は大失敗を犯してしまった。まさにマナー違反である。前日の夜、オーナーの伊藤さんに「長袖のシャツと長ズボンで登ること」との指示があったが、私は半袖、半ズボンしか準備していなかった。翌朝、私以外の全員が完璧な装備をされていた。「私はなんて無知なんだ」と自分の愚かさを再確認させられた。事前確認も疎かに、自分勝手な判断で行動し、山と言う大自然を甘く

考えてマナーを守らなかったこと。これは「知らなかった」では済まされないことであり、多くの方々に迷惑を掛けてしまった。これからは事前確認を確実に行い、自分勝手な行動を取らないだけでなく、固定観念を捨て謙虚に反省することを決意した。

感謝の心

8月18日。全国高等学校定時制通信制バレーボール大会が行われた。私が監督として率いているデンソーの企業内高校のチームが2年連続3度目の優勝を果たしてくれた。しかし、優勝までの道のりは決して楽なものではなく、準決勝で予想外のアクシデントに見舞われ、決勝戦にはライトプレーヤーが出場できなくなった。正直、決勝のポジショニングに頭を痛めた。

決勝戦の相手はこれまで何度も練習試合を行っている天理高校であった。お互いに攻め方は知り尽くしている。我チームの攻撃はレフトからの早い攻撃が中心で、ライト攻撃が少なかった。そのため相手ブロックもレフトを中心にマークしてくる。よって、ライト攻撃を多様することが我々のメリットだが、経験者の少ない我チームにとって、ポジションを替えると自ら崩れていく可能性もあった。どちらにせよメリットとデメリットはある。「だったらデメリットを怖れずメリットを生かしてみよう」と私は、チームで一番身長の高いレフトプレーヤーをライトで打たせることにした。まさにフランシスコベーコンの「失敗を恐れちゃいけない。トライもしないで逃すチャンスこそ怖れた方がいい」の精神である。これは産政塾生である私に「殻の外へ踏み出そう」と背中を押された気がした。

結果的にはこのポジションが大当たりで、彼のスパイク決定率は脅威の85%を上回り、優勝に導いてくれた。私は日頃の訓練を前向きに取り組み、私が指示した言葉の趣旨をしっかり理解して行動してくれる選手たちにとても感謝している。また陰で支えていただいた選手の家族、卒業生、会社関係者、学校関係者。そして、この大会を運営していただいた方々に感謝したい。私は今大会だけでなく、これまで多くの方々と出会い、支えられて成長できたことを心の底から感謝している。「ありがとうございました。」

思いやりの心

9月30日。この文集の締切日まで残り一ヶ月となった今、私は「カシコギ」と言う本と出会った。この物語は白血病と戦っている小学2年生のタウム少年と、その少年を助けたい一心で看病する父親チョンの心の葛藤が描かれていた。

『「あなたが虚しく過ごした今日という日は、きのう死んでいった者があれほど生きたいと願った明日」これはタウムのベッドサイドの壁に書かれた文章である。しかし、彼は「あとどれだけ痛みを我慢すれば僕は死ねるの。こんなに痛い思いをしたんだから、もう死んでもいいじゃない。」と死を選ばざるを得ないほどの痛みと戦っていた。そんなタウムが「少しでも生きたい。生きられるなら薬でも注射でも我慢できる自信がある。僕は生きたいし、幸せになりたい。」と言ったのは死期が近づいた頃であった。』

人は死に直面し、心の隙間がなくなったとき「生きたい」と言う人間の本心が表れるのだと確信した。そして、最後まで諦めてはならないとも感じた。なぜならば、絶望的だと言われていた骨髄移植のドナーが奇跡的に見つかり、結果的に手術は成功したからである。

『チョンはタウムの治療費に、仕事を辞めた退職金と家を売ったお金をあてた。しかし、これだけでは足りず、とうとう臓器を売ることを決めた。無論違法行為であることは知っていたが、ほかに方法が見つからなかった。しかし、検査の結果は無常にも「肝臓癌」の告知だった。そんな彼は「残り半年、片目で過ごすのも両目で過ごすのも同じだ」と角膜を売ってまですべてを清算した。』

私には角膜を売ってまで息子を助けるなどとても真似できないし、考えもつかない行動だと思う。本当に息子を助けたい心がこの行動を起こさせたと思うし、ここまでの想いを馳せてこそ本物の思いやりだと感じた。

『二人にとって、ひたすら待ち望んでいた退院の日を迎えた。しかし、タウムにとっては素直に喜べない日でもあった。なぜならば、退院後はチョンと二人で暮らすものだと信じていたのに、タウムを捨てて再婚した大嫌いな母親とフランスに行く日でもあったからだ。そして、とうとう二人にとって最後の別れの瞬間が訪れた。本当だったらすぐにでも飛んでいき抱きしめたかったが、肝臓癌であることに気付かれたくなかったチョンは少し離れたところでタウムを止まらせた。この距離はタウムにとってもチョンにとっても苦しく、果かない遠いものだった。どうしてもチョンのところに行きたいタウムに対し、チョンは「これ以上お前の世話をするのはうんざりだ」と心とは裏腹な言葉で必死にタウムを遠ざけた。そして最後にチョンはこう言い放った。「パパはお前のことを忘れてしまうよ。

だからお前もパパのことを忘れてしまえ。」

タウムと一緒に普通に生活することを望み、息子を助けたい一心でひたすら退院の日を夢見て看病を続けたチョンは、タウムがフランスに出発して二日後、タウムとの楽しかった想い出がぎっしり残っている山小屋で息を引取った。』

チョンはもっと生きたかっただろうし、タウムと一緒に暮らしたかっただろう。また、病気のことも、もうすぐ死ぬことも、母親に渡したくなかったこともタウムに言いたかっただろう。そして何よりも父親として生きてきた証をタウムに伝えたかったはずだ。しかし、チョンは伝えるどころか、それらすべてを心とは裏腹な言葉でタウムを叱咤激励した。思いやりと言う言葉だけでは決して片付けられない、究極のやさしさに触れたような気がした。

おわりに

レールの上を歩くことは悪いことではない。ましてや共存していかなくてはならない世の中で、自分勝手なレールをつくる人のほうが迷惑なんだ。ただ、少し距離をおいて自分のレールを見てみよう。少し時間をおいて自分のレールを見てみよう。今まで気づかなかった転轍機があるはずなんだと。一本のレールにしか見えなかったレールに転轍機があったんだと。それに気づかない人が他人の描いたレールを他人によって進められていると勘違いしている。自分で気づければこのレールもまんざら悪くはないし、むしろおもしろ過ぎて忙しいくらいだ。

私はこれまでだっていろいろな経験をし、多くのことを学んできた。多くの人と出会い、私が経験したことのない体験話から疑似体験をした。本や映画からも疑似体験することで成長してきた。しかし、今回のように転轍機を見つけようとはしなかったし、自ら生かそうともしなかったような気がする。そのことに気づかせてくれた産政塾と、そのレールをつくり育てて下さっている中部産政研に感謝したい。また、私のレールに産政塾へ向かうための転轍機をつくっていただけた会社関係者に感謝したい。そして何よりも、この半年間で私に多くのことを気づかせてくれた第13期塾生の方々に感謝し、今後もお付き合いできることを楽しみにしている。これからも多くの転轍機を見つけるために…。

『産政塾の集いの中で・・・』

刈谷市役所
村　口　文　希

<プロフィール>

むらぐち　ふみき（36歳）
- 1965年12月　豊明市生まれ
- 1989年４月　刈谷市役所入社
  環境交通課配属
- 1994年４月　市民税課配属
- 1999年４月　企画政策課配属
  現在に至る

<家　族>　妻　娘
<趣　味>　英会話　サッカー

過去において刈谷市から産政塾への参加は一度もありませんでした。

そうした中、今回、刈谷市にも照会があり、十三期の産政塾に刈谷市が参加することとなりました。その際、、何の因果か上司から「どうだ行くか？」と問いかけられた私は、内容は全く分からないし、それを尋ねる人もいません。十二期の参加者の名簿を見ると、メンバーの勤務先もそうそうたるものでした。

正直言って悩みました。しかし、同世代の、しかもこんなことでもなければ絶対に接することの出来ない人たちと時間を共に出来るチャンスをみすみす逃す理由はありません。喜んで承諾しました。

第一回の産政塾に参加した日のことは今でもはっきりと覚えています。なんだかんだ言っても、緊張のために朝から何となく気分がすっきりせず、全労済豊田会館へ向かう名鉄電車に揺られる時間が非常に長く感じました。

開塾式では願興寺中部産政研事務局長の挨拶。続いて、それぞれ緊張しながらも笑いながらの自己紹介。私も配られた自己紹介シートに基づき、自分なりに満足する自己紹介ができたつもりでした。しかし、そこらへんはさすが百戦錬磨の労組関係の人たち、上手に笑いを取り入れながら自己ＰＲをしていました。自分としては百二十点くらいの自己紹介ができたと思ったのですが、みんなの自己紹介を聞いた後では、自分の自己紹介は三十点くらいにしか思えませんでした。

そうこうして始まった産政塾ですが、最初の思いとは裏腹に本当に楽しく有意義なものでした。

最後の蓼科登山は参加できませんでしたが、それ以外は毎回参加させていただき、そこで得たもの、出会った人、体験したこと、それらすべてに大きな刺激を受けました。

第一回の緑ジムでのボクシング体験は、初回ということもあり自分の中で特にインパクトの強いものでした。ボクシング体験そのものは、なかなかのものがありましたが、その中で特に自分の目に焼き付いたのは、練習生一人ひとりに声をかける加藤トレーナーの姿でした。彼は、一人ひとりの特徴をとらえ、長所短所を指摘しながら、パンチパーマにヒゲというその風貌からは想像できないやさしい言葉で話しかけていました。そして、彼から話しかけられた練習生のうれしそうな顔も印象的でありました。そこには、人を育てるすべてがあったように思われました。

〜多くの汗を流した半日、激しかった練習は、高校時代にがむしゃらにハンドボールに明け暮れていた頃の自分を思いだし、今、そのひたむきさに欠けている自分へのメッセージであるようでした。〜

第二回の関谷醸造では、できたてのお酒をいただき感じた清涼感。まだ炭酸ガスが残り、まるでスパークリングワインのように感じた喉ごしが、今でも思い出されます。

関谷醸造を訪れて最も印象深かったことは、全てにおいて機械化されている点でした。昔のいわゆる酒蔵というイメージはまったくなく、施設内を見学してもさながら研究室か工場かというイメージ

です。伝統を重んじる師匠と弟子の世界から機械化に取り組んだ会社としての決断、そしてその結果の成功。いわゆる常識の世界を踏み出すその決断は、毎日を惰性のように生きている自分にとっては耳が痛いものがありました。

どんな世界にも時代の変化の波は押し寄せてきていることを知り、その波にうまく乗った関谷醸造の先を見る目、その重要さを改めて感じました。

～現状に満足せず、問題意識を持って、常に先を見る。改めて自分を見つめ直しました。～

第三回の岡崎イオンショッピングモールでは、CSマネージャーの吉野さんの意見のすべてがとても興味をそそられるものでした。おそらくまだ三十代前半にしてあの知識と自信、そして経験。岡崎イオンのCSのすべてをしきっている彼の姿には見習うべきものが多々ありました。いつにも増して塾生からは活発な質疑が繰り返され、今回のイオンから受けた刺激は大きいものでした。

～時代に即した戦略　お客様本位のCS経営　今回もまた良い刺激を受けました。～

第四回の常滑焼き体験では、講師の中野先生がろくろを使って目の前で花瓶を作ってくれました。中野先生の両手の中で土はまるで生きているかのごとくあらゆる形に変化し、見ている我々は息をするのも忘れるぐらいに見入っていました。そしてそれはいつの間にか丸みをおびてその後は、あっと

いう間に花瓶へと形を整えていきました。伝統の技、そこには説明する言葉など全く必要なく、見ている我々にその素晴らしさが伝わってきました。

「一つのものを極める。」先生の技を見て、それが大事であることを改めて感じました。

～伝統の中にも新しい発想を　常に広い視野を持っていたいものです。～

さて、このあたりで自分のことについて話しますが、今私は、国際交流とボランティア支援に関する仕事をしています。一般的に今の職場は三年から五年くらいで配置変えになりますが、市役所の場合、あまりそれまでの経験が活かされない全く違うタイプの職場に変わります。私の場合、はじめは環境交通課への配属でした。市役所の仕事は、本当に多種多様なものです。みなさんのイメージからすると1階の窓口で住民票などを黒縁メガネをかけたおじさんおばさんが発行している、そんなイメージをお持ちの方もいるかもしれませんが、そればかりではありません。一つ例をあげれば、最初に配属になった環境交通課では、駅前に放置された自転車を週一回トラックに積み、撤去していました。また夏のある暑い日は、池の魚が酸欠で大量に死んでいると連絡を受け、腐って悪臭ただよう魚を一日中、2トントラック三杯分も回収したこともありました。

その後、配置変えで今度は税務課へと変わりました。肉体労働から税金の計算ばかりのデスクワーク。体が慣れるのにしばらくかかりました。税務課で五年を経て、現在の企画政策課で四年目を迎えています。

そんな毎日の中、プライベートの方に話しを移しますと、最近はなかなかやれる時間が取れないんですが、お遊び程度にテニスをやって楽しんでいます。また、最近、職場ではフットサルクラブが発足し、誘われていますのでやってみようかな、なんて思っています。

フットサルと言えば、サッカーですが、サッカー観戦は大好きです。前回のフランス大会のワールドカップあたりから日本代表の試合も何度か見に行きました。ここ最近でも昨年六月のコンフェデレーションカップでは新潟まで行ってカメルーン戦を、同大会の決勝も横浜まで行きフランス戦を、さらに十一月の埼玉スタジアムのイタリア戦も見に行きました。今年に入り、もちろん先日のワールドカップもチケットをゲットし、横浜まで見に行きました。。年内も十一月の日本対アルゼンチン戦、トヨタカップに行く予定です。こんな感じで、今はずいぶんとサッカーにはまっていますが、自分としては、興味を持ったらかなりのめり込むタイプだと思います。まー、熱しやすく冷めやすい部分もありますが・・・。

さて、話しを仕事の内容に戻しますが、就職して十四年目、去年から国際交流とボランティアの関係を受け持つことになりました。それまでの仕事と違い、この仕事はボクに人として多くのことを教えてくれました。

国際交流に関しては、市民交流という観点で外国人と接する機会があります。お互い求めるモノは相手への理解です。それぞれ心と心が通じ合い、素晴らしい感動を覚えることができます。その中で、もちろん自分も含めた現代人は、相手への思いやりを忘れていることをつくづく感じました。彼らと

の交流は、言葉が上手く通じないが故に、懸命に相手を理解し、自分を分かってもらおうとするため、自分自身のアンテナや視野を感度よく、幅広くする必要があります。その結果、自分とは違う価値観、相手の人格、異文化への理解を受け入れる必要を痛感します。そこで相手のことを考えていない自分と出会うことになります。

また、国際交流の分野の中で、親善ボランティアとしてお手伝いしてくれる人たちは、在住外国人に日本語指導教室を行っていたり、留学生や訪問者のための日本文化紹介、あるいはパンフレットやガイドブックの通訳翻訳と幅広く活動しています。彼らはボランティアとして余暇を精力的に活動しています。したがって彼らと接することは、どちらかと言えば今までそうしたことに興味がなかった、いや意識すらしなかった自分にとっては、とても刺激的なものとなりました。彼らのスタイルは、素直にうらやましく、自分もそうしたいと思います。しかし、それらは皆、あきらかに自分の枠の外のものでした。

今、そのボランティアの中に入っていこうとする自分がいます。自分の枠の外　いわゆる仕事一辺倒だった今までの生活とは違う新しい生活へと踏み出そうとしています。もしかしたら、今まであまり行動を起こせなかった自分の背中を後押ししてくれたのも産政塾なのかもしれません。

人それぞれ、殻の大きさも違えば、硬さも違うと思います。しかし多かれ少なかれ誰でもみな、今

の自分の殻から抜け出したいと思っているのではないでしょうか。しかし、そのための勇気や方法、時間といったいわゆるタイミングを失い、実行できないでいるのではないでしょうか。今回の産政塾はそうした自分を見つめ直す良い機会となり、改めて、世界の広さ、幅広い様々な人の価値観・考え方を知り、殻（自分自身の価値観）の外に出ることの素晴らしさを感じ取ることができました。

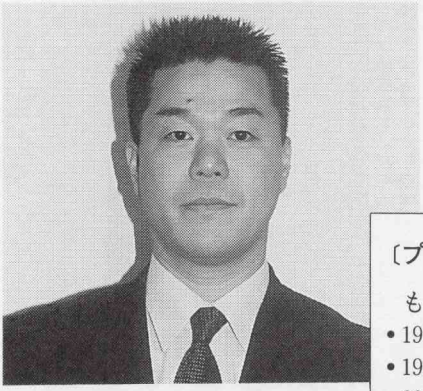
また、おそらく今までもそして今後も産政塾に参加しなければ決して知り合うことがなかった異業種の仲間たちと接することが出来たことも大きな財産となりました。一時ではありますが、みなさんと同じフィールドに立つことが出来たことは、言葉で言い表わすことのできない貴重な経験となりました。全てにおいてご尽力いただいた事務局の安井さん、十三期のメンバーのみなさん、こうした集いに参加させてくれた職場、そしてそれを提供してくれている中部産政研に本当に感謝いたします。

今、産政塾を終えて、自分の殻は破れていません。

でも、今まで破ろうとすらしなかった自分が、殻を破ることの素晴らしさを知り、あらためて殻は破ることが出来るんだと認識したことは、今後の人生においてとてつもなく大きな収穫であったように思います。

いつの日かまたお会いしましょう。

「ふれあい」



東邦ガス労働組合
森　　勝

〔プロフィール〕

もり　まさる（37歳）

- 1965年10月　名古屋市生まれ
- 1984年４月　東邦ガス㈱入社
- 2001年７月　労働組合執行委員
  現在に至る

＜家族構成＞　妻、長女11歳、長男８歳、父母
＜趣　　味＞　飲み歩き（いも焼酎の「神川」「海」が美味しい）

はじめに

約7ケ月の間、産政塾の皆さんには大変お世話になりとても感謝しております。塾生の皆さんとの「出会い」をうれしく思います。ありがとうございました。

この産政塾では、自分の人生を見つめ直す機会を与えてくれたと思います。参加率の悪かった私が参加したボクシング体験では、自分の体力の無さや脂肪の重さを痛感しました。若い頃はもう少し動けたはずなのにと思い、その後少しずつ汗をかくことに心がけた結果、産政塾を終える頃には少しスリムになったような気がします。皆さんとの出会いによって多くの得るものがあった反面、体の脂肪を少し失ってしまいました・・・?。

そこで何を卒業論文で書けばよいかと思い考えていたところ、初心に戻る気持ちを持とうと思い、若い頃に参加した多分野における研修の冊子を見ていました。それを懐かしくながめていると講演内容や若い頃の自分の色々な考え方が自分なりにメモしてありました。そこで、自分の若い頃に研修で得た考え方とこの産政塾を終えた現在の自分の考え方を比べながら論文に残していこうと思います。

《ラグビーと私》

私は学生時代にラグビーをやっていましたが、この「ラグビーと私」という講演は今でもとても印象的です。ラグビー精神に「ワン・フォー・オール　オール・フォー・ワン」「一人はみんなのため

に　みんなは一人のために」という言葉があります。この言葉は、「自分の人生の言葉だ」と思います。自分が自分がと我を張るときもあるかもしれませんが、誰かのためにとか人を想う気持ちを持つことがとても大切だと思います。

「今をガンバレ、今日がなければ明日はない!!」この言葉もとても好きです。人には平等に与えられている時間があり、それをどのように使うかは人それぞれの自由だと思います。何かをやり遂げるときには悔いを残さないように今できることを今やっておく。今やらないといけない、あとで後悔しないようにという意味で、自分は今を一所懸命生きていきたいと思います。（仕事も遊びも）

団体スポーツではチームワークが大切であり、パスを出すにも信頼関係が必要であると思いますが「信頼関係とは小さな約束をきちんと守る」この言葉を聞くと思い出すことがあります。営業マンをしていた頃、もう少しで契約がもらえるお客さまと待ち合わせ時間に10分程遅れたことにより、お客さまの気分を害してしまいました。最終的に契約がもらえなくなり、お客さまとの信頼関係が崩れてしまいました。若い頃は10分ぐらい遅れてもいいかという相手のことを考えない自己中心的なところがあったと思います。現在は、約束時間に余裕を持つ事、相手を待たせるより自分が待つ事、遅れそうな時は約束時間前に電話をするように気をつけています。

スポーツの世界に限りませんがあいさつは大切だと思います。「あいさつと笑顔の大切さ」この言葉は、私のなかで一番心がけて行動しています。家庭や職場、地域の皆さんに自然にできるように、また相手があいさつをする前にできる限り自分からするようにしています。家庭では、朝のあいさつと夜のあいさつをしっかりするようにしています。我が家の子どもが私のあいさつに対してあいさつ

を返してこない場合は、子どもがするまで何度も繰り返しあいさつをし続けています。朝から笑顔でさわやかにあいさつすることで、家庭も職場も気持ち良く一日が過ごせると思います。

他に印象に残った言葉は「何事も良い方向へ考えることで強まる精神力」この言葉は、私の現業務に力を与えてくれる言葉です。色々な家を訪問する業務のなかで門前払いを受けることもあります。その時は、面会した方の忙しい時や機嫌が悪い時だったと良い方向に考えることで次の家へ足が向いていきます。

＜その他の印象に残った言葉＞

- 人は謙虚な気持ちでいた方が良い
- 励まし合いながら教え合う気持ちを大切に
- 自分に厳しければ、他人にも厳しくできる
- コツコツと地道に努力する。

《雨の日は雨の中を　風の日は風の中を》

この講演では、自然現象に逆らわないことを教えられました。

若い頃は、雨の日は嫌だなと思ったり、気分が乗らないなと思ったりしていましたが、雨は降らないと飲み水も確保できないと思えば、雨が降ることもしょうがないと思えます。

この講演の中で印象的だったのが「自分がいなければ何もできないは思いあがり」という言葉です。

仕事や家庭において自分がいなければ何もできないだろうという我の強さは思い上がりという意味だと思います。自分がいなくても仕事も家庭も回っていく、地球も周って行くんだという気持ちも必要であると思いました。病気をした時は無理をせず会社を休めば良いと思います。無理をして長期の休みになれば周りの方に迷惑がかかることになります。でも色々な立場において仕事・家庭で「俺が」と我を張っていく時も場合によっては必要だと思います。

他には、合理的な時間の使い方についての話がありました。車のハンドルに遊びがあるように、人にも自由な時間があり遊び心も必要ということや「人生の達人とは」時間をうまく使っている人という話がありました。私は人生の達人にはなれませんが、仕事中は楽しい雰囲気になるよう心がけ、仕事の中に遊び心も取り入れた発想をしていくことにより周りの人も楽しく仕事ができると思いました。但し、時には今の時間は戻ってこないから、瞬間、瞬間を大切に生きる時も必要であると思います。

＜その他の印象に残った言葉＞

- 自分ですべてやるのではなく、相手に任せる「責任感」を与えることも必要
- 何事もプラス思考で、良い時もあれば悪い時もある。悪い時の経験を活かす
- 「青春」は理想を失わないこと、理想の人を見つけ目指していく

《人生は振り子》

- 苦しみが大きければ大きいほど幸せも大きい

- 苦しみが小さければ小さいほど幸せも小さい
- 苦労が多ければ多いほど幸せも多く来る
- 苦労が少なければ少ないほど幸せも少ない

この言葉を聞いた時感じたことは、人はそれぞれ大きく振る人小さく振る人がおり、それぞれの人生を送ると思いました。自分はできることであれば大きく振っていきたい。小さく振ることは何事にも逃げている感じがしたからです。しかし、現在37才になって考えるとひょっとしたら小さく振らないといけない時期もあると感じました。物事によっては、でしゃばらず我を張りすぎないように周りとの調和を大切にすることも必要だと思います。

おわりに

産政塾では、「出会い、ふれあい、語り合い」の大切さを教えられました。産政塾を通じて色々な企業の方々と出会い、ふれあい、語り合うことができ、仕事以外での人との出会いの大切さ、年齢差を関係なく対等に語り合えることのすばらしさを教えられました。

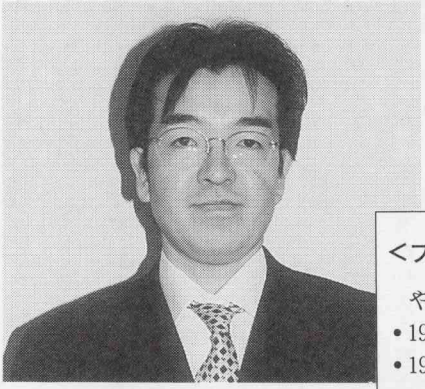
今後は、自分の視野を広げることにより数多くの「出会い」を大切にし「ふれあい」「語り合い」の中から自分が成長していきたいと思います。どれだけ多くの「出会い、ふれあい、語り合い」をすることが私にとっての人生の財産になると思います。しかし、産政塾参加の期間に仕事などでとても尊敬していた人との「別れ」がありました。その人はとても笑顔がすばらしく、誰にでもやさしい、

とてもいい人でした。その人をすごく尊敬しております。でも今はその人を想い、これからの人生をしっかりと生きていかなければいけないと思います。天国から「森君」「勝君」ガンバレと励ましてくれていると思います。

この卒業論文は20代に参加した研修メモから作成しましたが、一つひとつ自分なりに今後の人生のためになる言葉にしていきたいと思います。この気づきを産政塾の皆さんが今の私に再認識させてくれたと感じています。

産政塾は、私の人生にとって初心の気持ちを思い出させてくれたと思います。また、この期間での「出会い」と「別れ」も忘れ得ぬことのできない大切な時間でした。今後も人と人、心と心の『ふれあい』を大切にし、悔いのない生き方をしていこうと思います。産政塾のスタッフ、塾生の皆さんに感謝をするとともに、これからもよろしくお願いいたします。

「町の先にあるもの」



アラコ株式会社
山　本　徹　真

<プロフィール>

やまもと　てっしん（32歳）
- 1970年９月　岡崎市生まれ
- 1994年４月　アラコ株式会社入社
　　人事部配属
- 2002年10月　総務部へ異動

<家族>　奥さま、坊ちゃん、嬢ちゃん
<趣味>　演劇鑑賞、スポーツ観戦

「書を捨てよ　町へ出よう」って本がありましたね。（と言ってもタイトルを知っているだけで、本は読んでいないんですが…。）実は今回、産政塾に参加するということが決まった時に、真っ先に頭に浮かんだのは、この言葉でした。そして私にとっての産政塾はまさしく、「書を捨てて、町へ出ていく（書類をほっぽりだして、よくわからんところへ体験しにいく）」そのものだったのです。

「殻の外へ踏み出そう！」これがテーマの産政塾では、ともかく行動しないと始まらない。記念すべき、産政塾第一回、それぞれのグループで、「あーでもない、こーでもない」と話し合いをするのですが、なにせ初対面、なかなか決まらないんですよね。

このような中、突破口を開いたのが、トヨタ自動車の野坂さんをはじめとするグループでした。なんと！その内容はボクシングの世界チャンプを輩出している「緑ジム」へ行きトレーニングをするというもの。これがまた、ものすごい衝撃でした。ジャブを打ち続ける三分間の長いこと長いこと。今まで、カップラーメンのできあがりを待つ三分間って長いなあと思っていたのですが、緑ジムでのトレーニングの三分間はこの比ではなかったです。（例えが悪すぎ？）

ともかくこうして始まった産政塾ですが、以後、①関谷醸造にて幻の酒「空」がいかにして作り上げられているか（まさに伝統と技術の融合でした）②ショッピングモール「イオン」にてＣＳ（お客様満足度）、ＥＳ（従業員満足度）の探求　③常滑焼体験　④蓼科山登山と北極点到達の経験をもつ方とのお話…と、普段の会社生活の中ではまず体験できないようなことを様々させていただきました。

この産政塾を通じて、感じたのは「殻」って何なのだろうということでした。ということで、自分自身にとって殻＝核となっている部分がどのようなものなのかを、まず考えてみたいと思います。

学生時代、私は演劇をしていました。劇団員が三十名弱の小さな劇団で、大学の共同練習場という小屋を「練習場」兼「劇場」として活動していました。通常、一つの芝居を作るのに一ヵ月半から二ヶ月程かかるので、年に四回も公演をおこなう私たちは、勉強以外の大半の時間を芝居をして過ごすことになります。

それ程の時間をかけてでも、私が演劇を続けてきた理由は、何といっても公演での充実感にあります。良い芝居をしている時に感じる舞台上の役者とお客さんの一体感。お客さんが心から笑い、感動してくれていることが肌で分かります。そして演劇という場を通して普段は全く他人のはずの人々と感情を共有化できる。一体化し、分かり合える。こんな経験ができたからだと思います。

さて、その公演もたいていは二、三日しかおこないません。つまり準備期間のほとんどは汚いジャージを身にまとった練習ということになります。昼間は講義や研究があるので練習は夕方からになります。筋トレ、発声等の基礎訓練おこなった後、夜十二時近くまで稽古・道具作り・衣装作りや音響、照明あわせ等・・・、こんな暮らしが毎日続きます。

さて稽古をおこなっていると、様々な問題が出てきます。役者はお客さんを魅了する「演技」をしていかなければならないのですが、正直なかなかうまくいきません。台詞のいいまわしや感情表現、そして劇場の最後尾にいるお客さんにも分かる動き（表現）をいかに「自然」であるかのように見せ

るというのは本当に難しいことなのです。

このようなことから、公演が近づいてくるに従って、かかってくるプレッシャーやストレス、それに寝不足が重なり、次第に団員同士のぶつかり合いが始まります。ケンカ腰で討論になることもしばしばです。しかし、これは良い作品を作り上げるため、それぞれが何とかしようと現れてしまう感情なのです。こうしたぶつかり合いを皆で乗り越え、真の仲間を作ってきたように思います。

これらの経験をベースに入社後は、会社の中でもまれ、失敗や成功を繰り返し、今の自分というものを形成してきました。会社で感情を剥き出しにして討論するようなことは、まずありませんが、仕事の進め方や集団での協調性のとり方、モチベーションの維持方法、人間関係、困難をどう乗り越えていくか？など、会社生活で生かすことのできた多くは劇団で得たものを応用してきたものでした。

しかし、その会社生活も九年目を迎え、いつのまにか慣れの部分が多くなってしまったように思います。（いかん、いかん）このため、今回の経験を通して改めて感じたことを次に述べていこうと思います。それは「夢を持つ事、努力していくことの大切さ」です。

産政塾でお会いした方々に共通して感じたことがあります。それは、彼らが夢を持ち、それを現実の目標に落とし込んで努力しているということです。例えば、関谷醸造で「おいしい酒を作りたい」考える事そのものは、実は夢なのだと思います。しかしながら、「おいしいお酒」とは何なのかを考え、時代にあった製法は？品質を作り上げるために何をすべきか？を追求した時に、それは目標（課題）になります。まず既製品である「空」を購入するお客様は何を求めているのか？製法する上で、

人間でなければどうしてもできない部分はどこなのか？機械の方が均一な品質になるものは何なのか？こうした事をとことん追求し、明確にしていきます。さらに企業秘密ともいえる麹に改良を加え、幻の酒とまでいわれた「空」が出来上がっていくのです。しかし、その一方で、新しい品質の米・水・製法を模索し、今後のニーズに合った酒作りを追求しています。これらは、まさに日々の努力の積み重ねです。そしてこうした出来事は関谷醸造だけのことではなく、産政塾でお会いした方々（ボクシング、イオン、焼物、蓼科…）に共通しているものでした。

このような「努力を継続すること」を私は改めて大切なことだと感じました。以前読んだことのある本に次のようなものがありました。

「努力すれば報われる。そんな言葉は嘘っぱちだ。努力してもまったく報われない人だって沢山いるよ。でもね、いいかい、成功する奴ってのは必ず努力をしているものさ」

皆、努力することが大切だということは知っています。でも努力しても結果が伴ってこないことだって沢山あります。だから私達は何かと理由をつけて、サボってしまいます。そこを彼らは努力を続け、成功しました。私は彼らの成功そのものもすごいと思います。しかしながら、その成功は努力があったからこそなのだと思います。おそらく私には想像もつかない苦労が山のようにあったのでしょう。しかし、それを乗り越えて、努力できた理由はなんなのでしょうか？それは「おいしい酒をつくりたい」「チャンピオンになりたい」という根本的な夢の部分が、彼らにとってものすごい価値を持っていたからだと私は思います。夢を持っているからこそ、苦しくても努力ができたのです。

さて、それでは彼らとの出会いは、私にとってどのようにして「殻の外に踏みだす」ということに

つながるのでしょうか？ボクサー、職人、陶芸家、登山家・・・。彼らは、今まで私が過ごしてきたサラリーマンとしての環境とは全く違った世界にいました。努力に努力を重ね、世の中で認められる存在になりました。しかし、彼らが語るボクシングやお酒、陶芸や山（北極点）の魅力について語るとき、私にない価値観や情熱を彼らが持っている事にも気がつきました。

産政塾の目的は「殻の外へ踏みだす」事だとありました。正直な話、当初、産政塾では新しい体験を通して単純に新しい自分を見つければよいのだと思っていました。しかし、今、私にとって「殻の外へ踏み出す」という事は、「他」を受け入れていく事、その上で、良いところを取り込み、成長していく事なのだと考えています。

頭で考えるのは簡単です。しかし、実際に「他」を受け入れていく事ができるのは三十代に入った今からなのだろうと思います。なぜならば、私にとって十代から二十代にかけては自律した考え・価値判断をすることのできる、そんな自分を作り上げていく時期だったように思うからです。先に述べたように演劇で得た価値観に仕事での経験を踏まえ、自己形成してきました。多様な価値観が身の回りにあったはずなのですが、今思えば、この時期は自分にとって都合のいい価値観しか、吸収してこなかったのではないかと思います。そうではなく自分の考えが確立してきた今だからこそ、多様な価値観に触れ、「他」を受け入れられるのではないかと思います。しかし忙しい日々の中、異なった価値観を持つ方と触れる機会そのものが減ってきているのが最近の実状でした。こんな時、産政塾を通して新たな方々と出会えた事に大変意味があったのではないかと思います。

これからの将来を考えてみたとき、私達が携わっていく業務は、おそらく今よりもさらに高度なも

のになっていきます。例えば、会社間、部門間での折衝においても、最終決定していくような場面も多くなってくるでしょう。また一緒に仕事をしていく仲間に対しても、自分だけのやり方に固執したり、一方的に押しつけるのではなく、今よりもさらに、仲間を尊重したやり方をしていかなければなりません。このようなときに、必要になるのは幅の広さ、つまりどれだけ違った価値観をもった人たちの意見を自分自身に取り込み、その上でベストだと思われる選択をしていくことができるかということになるではないかと思っています。そして今回はそのきっかけになったように思います

「書を捨てよ、町へ出よう」と冒頭に書きましたが、さらに大きな人間となるため、新しい価値観（刺激）に触れ、どんどん未知の世界へ飛び出していこうと思います。「殻の外へ踏み出していく」のはまさに今からです。私は今日から、その一歩を踏み出していこうと思います。

最後になりましたが、今回の産政塾にあたりましては事務局の安井さん、十三期生の皆さんには大変お世話になりました。（うるさい奴でご迷惑をおかけしました。）皆さんのおかげで本当に楽しい時を過ごさせていただきました。この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

時の彩り

中部産政研
安井孝一

私は、二〇〇二年八月末をもちまして中部産政研の主任研究員の職を解かれることとなりました。この冊子の発行の時期には既に中部産政研には在籍をしておりませんが、誌面をお借りしまして、お世話になりました皆様にまずもってお礼を申し上げたいと思います。この二年間での経験を胸に新しい職場においても精進してまいる所存です。

さて、第十三期の産政塾の修了を意味するこの塾誌の刊行は、私自身にとっても、とても感慨深いものとなりました。もちろん、第十三期生の塾生たちはこれを書き上げて一冊の本とすることが産政塾卒業の条件と言われてきたわけですから、完成の日を見たという達成感はひとしおでしょう。また、何年か後にこの冊子を手にとって産政塾での経験を思い返し、なつかしむということもあるでしょう。このことは私にとっても同じなんです。私も産政塾を卒業させていただくことになったのですから。二〇〇〇年の九月より中部産政研にお世話になり、翌年一月スタートの第十二期産政塾より、事務局の任を勤めさせていただきました。以来二年、十二期、十三期の塾生と共に産政塾に携わらせていただきました。私も三十代、塾生の面々とはまったく同世代です。事務局とは名ばかりで、まさに塾生と同じ思いで各企画に参加させていただいたと思っています。そういう意味では一期一年で終わってしまう塾生たちに比べて、私の場合は二期二年も貴重な経験ができたということになります。役得といったところでしょうか。

本当に産政塾はすごいな、と手前味噌ではありますが、つくづく感じます。何がすごいって、集まってくる塾生の面々がすごいんです。もうこれだけの面白い人物を一気に集めろと言われても無理だろうと思うくらい、みんな魅力を持った人たちでした。そんな連中が集まる塾なんだからすごいのも当然と思います。いろんな刺激を受けました。みんなそうだったと思います。同年代だった、組織

の呪縛のないところでの集まりだった、アウトプットを厳しく求められる性格の研修ではなかった、など、この集まりを自由で活発なものとしたいくつかの理由はあるでしょう。でも個々の塾生の魅力は何よりもこの産政塾をカラフルに彩ってくれたと思います。塾生の皆さん、本当に感謝しております、ありがとうございました。みんなも同じ思いを感じてくれるでしょうか。

もうひとつ、塾生のみんなと出会えたこと、それと同じように感謝していること、それが産政塾の各回の企画での講師の方々との出会いでした。ビリビリとハートに伝わってくる思いや、じんわりと訴えかけてくるメッセージは、明日からの自分自身の生き方というものに有形無形の影響を与えてくれたのではないでしょうか。

明日からの人生、自分自身が何か劇的に変わらなければならないとは言いません。勇気と自信のない私にはきっと難しいことでしょう。でも少しずつ変わっていくことはできると思います。それが成長するということなんだと思います。ひとつ殻を破り、またひとつ殻を破って、脱皮をしながら成長していくんですね。「殻の外へ踏み出そう」という産政塾のテーマは、三十代の若者たちが成長するための脱皮を促す意味だったのかと、今になって思い返しております。

私自身にとっての産政塾、振り返ってみてこんなことを今感じております。さて、塾生の皆さんはいかがでしょう。

そういえば、最終回の閉塾式で何人かの塾生の口から同じような言葉が聞かれました。それを締めくくりとさせていただきたいと思います。

「閉塾式が終わって、これからが産政塾の本番の始まりだ」と。

産政塾活動記録

《第１回会合》

日時：2002年１月24日(木)
場所：全労済豊田会館
内容：第13期産政塾開塾式、
　　塾長挨拶、塾生自己紹介、
　　グループディスカッション
　　親睦会

第13期産政塾に集った塾生

グループディスカッションも活発に

懇親会での乾杯！

第13期生の活動がスタート

《第２回会合》

日時：2002年３月20日(水)

場所：緑ボクシングジム（名古屋市）

内容：緑ボクシングジムを訪ねて

「体感ボクシング、男30代心身を鍛える」

トレーニング実体験、討論、

懇親会

目標・目的を持つことの重要性を再認識しました

やってみるとかなり
ハード

塾生の質問に答えてくれた加藤博昭トレーナー

懇親会後も
熱気は冷めません

《第３回会合》

日時：2002年４月19日（金）

場所：関谷醸造（設楽郡設楽町）

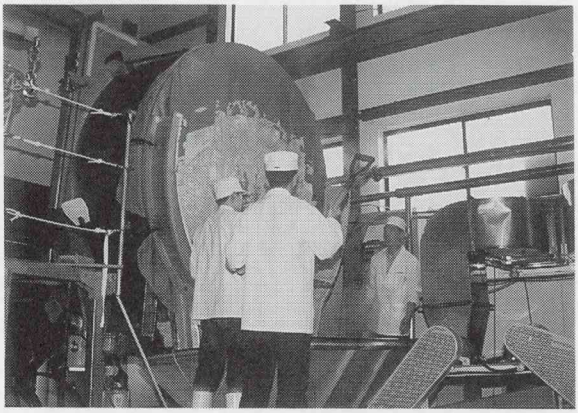
内容：杜氏遠山久男さんを訪ねて

「伝統と革新の融合、その戦略を探る」

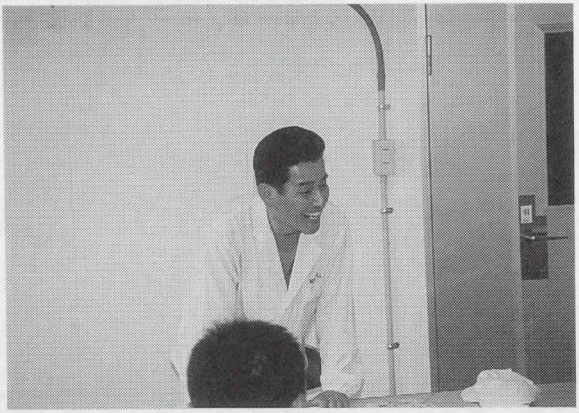
酒倉の見学、酒造りの紹介、討論、

懇親会

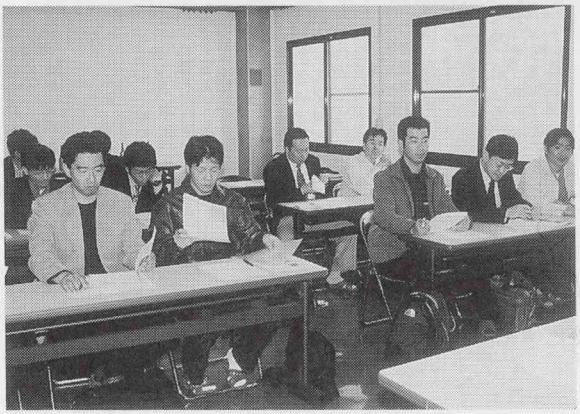
こだわりをもった巧みの技に触れました



精米を蒸し上げて
冷ます工程



杜氏の遠山さんは気さくに酒造りを語ってくれました



塾生たちも巧みの技に新たな発見

《第４回会合》

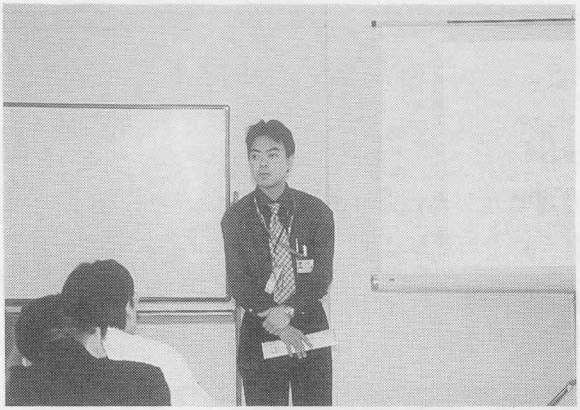
日時：2002年５月30日（木）

場所：イオン岡崎ショッピングセンター（岡崎市）

内容：「イオンの企業戦略を現地現物で学ぶ」

企業訪問、討論、懇親会

ＣＳ（お客様満足）を追求した企業戦略を学びました



ＣＳの取組みについてイオンモール㈱の吉野さんより

店舗内でＣＳを実感

環境への取組みも発見

《第５回会合》

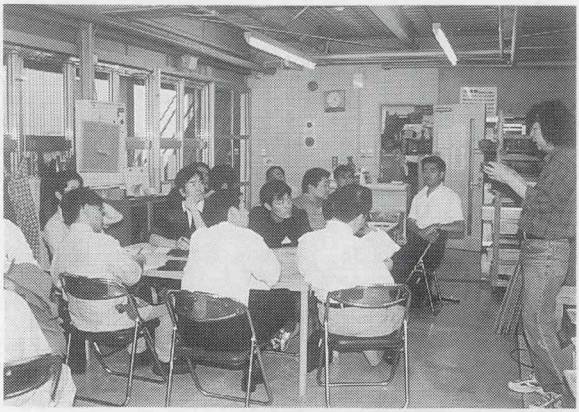
日時：2002年６月19日(水)

場所：とこなめ焼卸団地セラモール（常滑市）

内容：「千年の歴史、常滑焼に学ぶ」

陶芸体験、討論、懇親会

方円館にて陶芸を体験し、常滑焼が持つ千年の歴史を体感しました



講師の中野さんは日展入選の常滑焼の達人です

粘土相手に奮闘

懇親会も
常滑焼に囲まれて

《第６回会合》

日時：2002年７月25日(木)～26日（金）

場所：ペンションベルフォーレ（長野県立科町）

内容：「日本百名山、蓼科山（2,530ｍ）に挑もう」

登山体験、討論、懇親会

決して楽ではなかった登山でしたが達成感・満足感を味わいました

下山した後の表情もそれぞれ

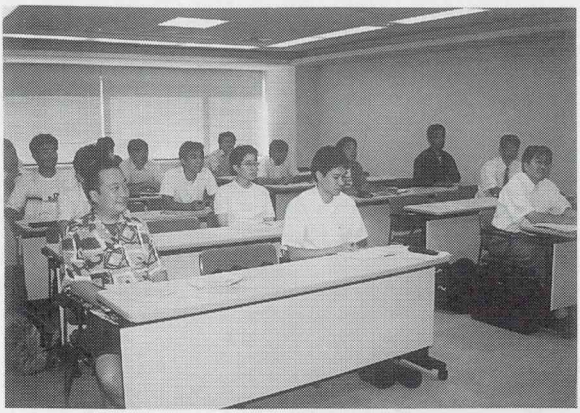
宿泊先の女神湖のほとりにあるペンションベルフォーレ

ペンションのオーナー伊藤さんは北極点踏破の経験を持ち、貴重な体験を聞くことができました

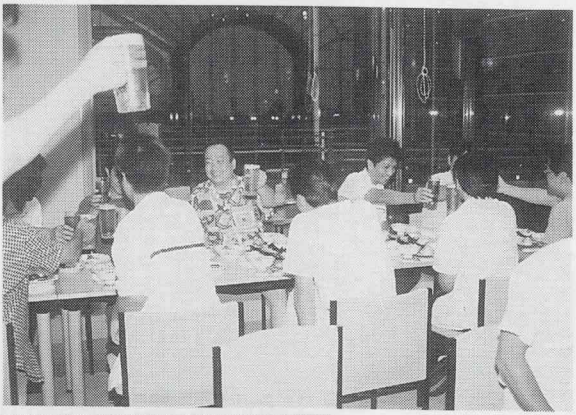
《第７回会合》

日時：2002年８月21日(水)～22日（木）
場所：あいち健康の森、健康プラザ（大府市）
内容：第13期産政塾閉塾式、
「産政塾を振り返って」討論
打ち上げ懇親会

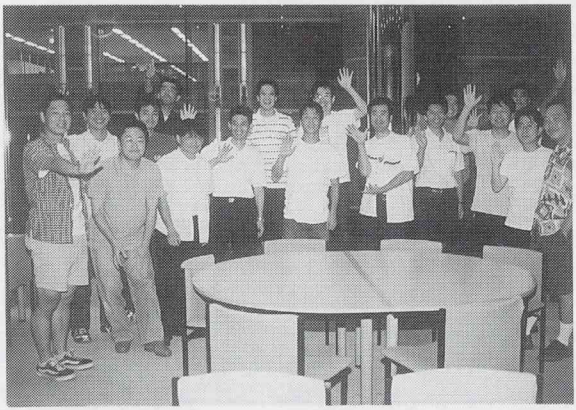
常滑焼の作品（第５回会合）も出来上がり、記念品とともに贈呈



産政塾を振り返る
なごやかな討論



締めくくりのカンパイ！



産政塾はこれからが本
番です

産　政　塾

2003年１月　　第４刷発行

編　者　　財団法人 中部産業・労働政策研究会
住　所　　〒471－0833
愛知県豊田市山之手８丁目131番地
全労済豊田会館　３Ｆ
ＴＥＬ　　0565－27－2731
印刷所　　㈲ 第一プリント社
製本所　　山　本　製　本

産政塾

塾　長　植本　俊一

塾　生

トヨタ自動車労働組合	井上　正勝
中部電力労働組合	内田　恭介
フタバ産業株式会社	梅田　清孝
松坂屋労働組合	太田　正樹
デンソー労働組合	門井　徳孝
トヨタ車体株式会社	熊崎　俊哉
アイシン精機株式会社	佐野　智弘
トヨタ車体労働組合	鈴木　定晴
名古屋鉄道株式会社	鈴木　武
株式会社豊田自動織機	田中　亘人
豊田市役所	夛和田光紀
全トヨタ労働組合連合会	出口　隆浩
アイシン労働組合	中川　年史
トヨタ自動車株式会社	野坂　利次
豊田工機労働組合	服部　淳二
アスモ労働組合	水野　雅通
株式会社デンソー	宮城　英樹
刈谷市役所	村口　文希
株式会社UFJ銀行	森　章浩
東邦ガス労働組合	森　勝
アラコ株式会社	山本　徹真

中部産政研	安井　孝一